

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第18集

松 門 寺 A 遺 跡

福岡県浮羽郡田主丸町大字常盤所在遺跡の調査

2002

福岡県教育委員会

松門寺 A 遺跡

福岡県浮羽郡田主丸町大字常盤所在遺跡の調査



調査区周辺（西を望む）

序

福岡県教育委員会では国土交通省九州地方整備局（旧 建設省九州地方建設局）の委託を受け、昭和55年度から一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。浮羽町、吉井町では大部分の調査を完了し、一部の区間で一般供用されています。

本書は、平成11年度に行った、浮羽郡田主丸町に所在する松門寺A遺跡の発掘調査記録です。今回の調査では、耳納山地から流れ下る河川を確認し、田畑や宅地の造成が進む以前の地形を知ることができました。また、この河川に流れ込んだ多くの遺物から、本遺跡周辺に弥生時代から中世にかけての集落の存在を推測しています。

この報告が、教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助になれば幸いです。発掘調査、整理作業及び報告書作成に当たり、多くの方々に御協力いただきましたことを、深く感謝いたします。

平成14年3月29日

福岡県教育委員会
教育長 光安 常喜

例 言

1. 本書は、平成11年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局（現 国土交通省九州地方整備局）福岡国道工事事務所から委託を受けて実施した、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査記録であり、浮羽バイパス関係文化財調査報告書の第18冊である。
2. 本書に掲載した遺跡は福岡県浮羽郡田主丸町大字常盤に所在する、松門寺A遺跡である。
3. 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真は尚ダイワに委託しラジコンヘリによる撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図は、調査担当者が実測し、飯田澄江、上村智美、江田裕子、河内享子、原紀代の協力を得た。
5. 本書で使用した方位は、国土地理院調査法第Ⅱ座標系に基づき極北である。
6. 出土遺物の整理・復元は横田義章の指導のもと、九州歴史資料館で行った。
7. 出土遺物の実測は調査担当者が行った。
8. 遺構・遺物の製図は豊福弥生、原カヨ子が行った。
9. 出土遺物・写真・図面はすべて、九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において保管している。
10. 本書の執筆は調査担当者で分担し、編集は今井が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査・整理の関係者	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 発掘調査の記録	10
第1節 遺跡の概要	10
第2節 遺構・遺物	10
1. 土坑	11
2. 溝	21
3. 旧河道	29
4. 包含層	42
5. その他の遺物	54
6. 松門寺遺跡西隣接地採集土器	66
第4章 おわりに	67

図 版 目 次

- 巻頭図版 調査区周辺 (西を望む)
- 図版 1 1 調査区西半 (空中写真 上が北)
2 調査区東半 (空中写真 上が北)
- 図版 2 1 1号土坑 (南西から)
2 2号土坑 (南西から)
3 4号土坑 (北から)
- 図版 3 1 5号土坑土器出土状況南半 (北から)
2 5号土坑土器出土状況北半 (北から)
- 図版 4 1 5号土坑完備状況 (空中写真 上が北)
2 調査区北壁土層 2号溝付近
- 図版 5 1 調査区北壁土層 中央付近
2 調査区北壁土層 中央付近から西を望む
- 図版 6 1・5号土坑出土土器①
- 図版 7 5号土坑②、2・6号溝、旧河遺出土土器①
- 図版 8 旧河遺出土土器②
- 図版 9 旧河遺出土土器③、西隣接地出土土器
- 図版10 旧河遺出土土器④
- 図版11 黒褐色土下層、黒褐色上層、灰褐色土層出土土器
- 図版12 出土土製品・鉄製品
- 図版13 出土土製品
- 図版14 出土石庖丁①
- 図版15 出土石庖丁②
- 図版16 出土石製品①
- 図版17 出土石製品②
- 図版18 出土石製品③、陶磁器等
- 図版19 出土土製品

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	8
第2図	調査区周辺字図および築理の復元 (1/10,000)	9
第3図	調査区位置図 (1/2,000)	10
第4図	1~4号土坑実測図 (1/40)	11
第5図	1・2号土坑出土土器実測図 (1/3)	12
第6図	5号土坑実測図 (1/40)	13
第7図	5号土坑出土土器実測図① (1/3)	15
第8図	5号土坑出土土器実測図② (1/3)	16
第9図	5号土坑出土土器実測図③ (1/3)	17
第10図	5号土坑出土土器実測図④ (1/4)	18
第11図	5号土坑出土土器実測図⑤ (1/4)	19
第12図	5号土坑出土土器実測図⑥ (1/3・1/4)	20
第13図	5号土坑出土土器実測図⑦ (1/4)	21
第14図	1号溝出土土器実測図 (1/3)	22
第15図	2~6号溝土層断面図 (1/20)	22
第16図	2号溝出土土器実測図① (1/3)	23
第17図	2号溝出土土器実測図② (1/3)	25
第18図	2号溝出土土器実測図③ (1/3)	26
第19図	6号溝出土土器実測図 (1/3)	27
第20図	旧河道実測図 (1/300)	28
第21図	調査区北壁土層実測図① (1/60)	30
第22図	調査区北壁土層実測図② (1/60)	31
第23図	調査区南壁土層実測図 (1/60)	32
第24図	旧河道出土土器実測図① (1/3)	33
第25図	旧河道出土土器実測図② (1/3)	34
第26図	旧河道出土土器実測図③ (1/3)	35
第27図	旧河道出土土器実測図④ (1/3)	36
第28図	旧河道出土土器実測図⑤ (1/3)	38
第29図	旧河道出土土器実測図⑥ (1/3)	40
第30図	掘りこみ部分実測図 (1/200)	42
第31図	黒褐色土下層出土土器実測図① (1/3)	44
第32図	黒褐色土下層出土土器実測図② (1/3・1/4)	46
第33図	黒褐色土下層出土土器実測図③ (1/3)	47
第34図	黒褐色土下層出土土器実測図④ (1/3)	49
第35図	黒褐色土下層出土土器実測図⑤ (1/3)	50
第36図	黒褐色土層出土土器実測図① (1/3・1/4)	51

第37図	黒褐色土層出土土器実測図② (1/3).....	52
第38図	灰褐色砂質土層出土土器実測図 (1/3).....	53
第39図	出土土製品実測図 (1/2).....	55
第40図	出土土製品・鉄製品実測図 (1/2).....	56
第41図	出土土盤実測図 (1/2).....	57
第42図	出土石庖丁実測図 (1/2).....	58
第43図	出土石製品実測図① (1/1・1/2).....	59
第44図	出土石製品実測図② (1/3).....	60
第45図	出土石製品実測図③ (1/2・1/3).....	61
第46図	出土磁石実測図 (1/2).....	63
第47図	出土陶磁器実測図 (1/3).....	65
第48図	松門寺A遺跡西隣接地採集土器実測図 (1/3).....	66
付 図	松門寺A遺跡遺構配置図 (1/300)	

表 目 次

第 1 表	浮羽バイパス各調査地点一覧	2
-------	---------------------	---

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

浮羽バイパスは、福岡県久留米市を起点に、大分県日田市を經由して大分市に至る一般国道210号の交通混雑の緩和と、浮羽郡内を中心とした地域産業の発展を目的としている。昭和48（1973）年度に事業化され、昭和52（1977）年度から用地買収に着手している。出主丸町豊城から浮羽町山北に至る総延長約14.0km、幅員16～25mの第1級道路で、現在、浮羽町と吉井町の一部で暫定的に対面2車線で供用が開始されている。

この浮羽バイパスの建設に先立ち、昭和47（1972）年2月3日付で建設省九州地方建設局（現国土交通省九州地方整備局）福岡国道工事事務所（以下、福岡工事事務所）から福岡県教育庁管理部文化課（現 総務部文化財保護課 以下、県教委）に、「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」との調査依頼があった。これに基づき、浮羽町所在の塚堂遺跡群の発掘調査が昭和54（1979）年度から57年度までの4年にわたって実施された。その後、昭和61（1986）年4月2日付で福岡工事事務所から再度「埋蔵文化財の分布調査について」との調査依頼があり、県教委は塚堂遺跡を除く計16地点で発掘調査が必要と回答した。この16地点について随時協議しながら、現在まで発掘調査を実施している。

本書で報告する松門寺A遺跡は13地点にあたる。平成11（1999）年10月7日に実施した試掘調査で遺構の存在が確認され、約2,200㎡を対象に本調査を実施することになった。調査地の都合から、まず西半分の調査を行い、その後反転して東半分の調査を行うことになった。

以下、調査の経過として日誌を抄録する。

〔平成11（1999）年〕

10月12日 表土はぎ開始。

26日 松門寺区区长 村木氏へ挨拶。

11月 2日 作業員、安全講習後、道具準備。遺構検出。

3日 遺構発掘開始。

11日 黒褐色土掘削開始。

24日 黒褐色土掘削完了。さらに下層の掘削開始。

12月 1日 旧河道発掘開始。

27日 平成11年の作業終了。

〔平成12（2000）年〕

1月 6日 現場作業開始。

20日 旧河道発掘終了。

21日 空中写真撮影。発掘道具を浮羽バイパス10地点（船越高原遺跡）へ運搬。

25日 反転作業開始。作業員は10地点へ応援。調査区西隣接地の地主さんから土器を預かる。

2月 1日 発掘道具を10地点から運搬。

2・3日 田主丸町立社会教育集会所の駐車場を借りて、出土土器の水洗作業。

4日 反転作業終了。

7日 遺構検出。遺構発掘開始。

- 9日 旧河道発掘開始。
- 14日 溝完掘。
- 24日 旧河道の中央と、調査区北壁・南壁に沿ってトレンチを設定。掘削。
- 3月 8日 旧河道発掘終了。湧水が激しいので完掘はしていない。
- 10-13日 空撮のための清掃。
- 14日 空中写真撮影。
- 15日 道具片付け。
- 16日 土器整理。
- 17日 機材撤収。調査終了。

第1表 浮羽バイパス調査地点一覧

地点	町名	工区と地点名	道筋名	対象面積(m ²)	発掘調査面積(m ²)	調査年度	報告年度	報告書番号
1	浮羽	9. 日永	日永	19,000	16,800	S61	H4・5	6・7集
2	吉井	7. 塚堂	塚堂	18,479	12,768	S54・57・59・61	S57・59・62	1~5集
3	吉井	7. 能楽	—	5,100	試掘のみ	H6	—	—
4	吉井	6・7. 三牟田	堂畑	8,400		H8・9・12~	H13~	17集
5	吉井	6. 新治	仁右衛門畑	8,400	3,000	H7・9	H11・12	12・14集
6	吉井	6. 稲崎A	稲崎A	6,300	1,600	S62	H9	9集
7	吉井	6. 稲崎B	稲崎B	4,900	520	S62	H9	9集
8	吉井	6. 清宗	—	2,400	試掘のみ	H1	—	—
9A	吉井	5・6. 上菅A	棚町・大礎	21,000	18,000	H1・2	H5	8集
9B	吉井	5・6. 上菅B	鷹取互反田	14,000	7,420	H2・5・6	H9・10	9・10集
10	田主丸	5. 船越A	船越高原	25,000		H8・H12H11~13		13・15・16集
11	田主丸	5. 船越B	船越二ノ上	20,000	18,500	H6・9	H10	11集
12	田主丸	5. 榎木		19,200				
13	田主丸	5. 常盤	松門寺A	15,000		H11~	H13~	本書
14	田主丸	5. 野田A		14,800				
15	田主丸	5. 野田B	大的・日詰	10,800		H12~		
16	田主丸	5. 野田C		13,500				
17	浮羽	7. 朝日	—	2,400	試掘のみ			
18	浮羽			28,400				
19	浮羽			16,600				

第2節 調査・整理の関係者

松門寺A遺跡の発掘調査および整理・報告の関係者は以下のとおりである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

(現国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所)

	平成11年度	平成13年度
所長	藤本 聡 森 将彦	森 昌文
副所長	兼武征二郎 新開幸一郎	有働 伸幸 田中 義高
建設監督官	有家 信義 中島 浩二	浅井 博海
調査第2課長	赤星 文生	久野 隆博
調査係長	香掛 孝	大榎 謙
建設技官	柳橋 孝博	佐藤 博信
工務課長	後藤 昌隆	末岡 彰
工務第一係長	古木 英昭	山口 孝
工務第三係長	斉藤 啓嗣	川内 学

福岡県教育委員会

	平成11年度	平成13年度
〔総括〕		
教育長	光安 常喜	光安 常喜
教育次長	藤吉純一郎	森山 良
総務部長	岩本 誠	三瓶 康夫
文化財保護課長	柳田 康雄	井上 裕弘
参事	井上 裕弘	
参事兼課長補佐		平野 義峰
参事兼課長技術補佐	橋口 達也	橋口 達也
同		川述 昭人
課長補佐兼管理係長	角 伸幸	
参事補佐兼調査第二係長	佐々木隆彦	児玉 真
〔庶務〕		
管理係長		三笠ひとみ
事務主査	吉武 祐二	
主任主事		森 俊二
〔調査・報告〕		
参事補佐		伊崎 俊秋

技術主査

伊崎 俊秋

主任技師

今井 涼子

技師

今井 涼子

発掘作業に従事された地元の方々には、湧水激しく土質が悪い状況下で、熱心に作業にあたられたことに感謝します。

発掘作業員の手配、募集に当たっては、田主丸町教育委員会生涯学習課丸林禎彦、江島伸彦の両氏、松門寺区区长村木勉氏に御協力いただいた。また、田主丸町立社会教育集会所の落田ようこ氏には、土器洗い作業等の際大変お世話になった。お礼申し上げます。



調査風景

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

松門寺A遺跡は浮羽郡田主丸町大字常盤に所在する。小字名は井尻になるが、現在の行政区が松門寺となっているので、遺跡名にこれを冠した。

本遺跡が所在する田主丸町は、筑紫平野の東端部に位置する、人口21,532人の町である。東は吉井町、西は久留米市と、北は筑後川を挟んで甘木市・朝倉町・北野町が隣接する。南には耳納山地がそびえ、その山頂をもって星野村・上陽町と境を接する。

町の地形は、耳納山地に源を発する小河川が形成した複合扇状地と、筑後川が形成した扇状地性の沖積平野に大別される。町の中央部を西流する巨瀬川、美津留川もまた、侵食と堆積の作用を繰り返し、処々に自然堤防と湿地を出現させている。本遺跡はこの自然堤防の端部に位置する。

切り立つようにそびえる耳納山地と豊富な水量を有する諸河川は、豊かな地下水を生み出している。山麓部でも深さ5～10mの浅井戸でよいほど水位が高い。本遺跡周辺は、田主丸町内でも地下水位が高いことで知られた地域で、現地表から1.5m下げたところで水が湧き、その水量の多さに調査中苦しめられた。

気候は内陸型の温暖な気候だが、冬は海岸地域に比して寒さが強く、雪が深い。

肥沃な土壌と豊かな水資源に恵まれ、現在、総面積5,099㎢のうち耕地が2,430㎢とほぼ半分を占める。埼玉県安行・愛知県稲沢とならんで植木・苗木の生産が非常に盛んなのが特徴的である。山麓部には苗木や巨峰を主とした果樹園が、平野部には水田が一面に広がり、地形に即した土地利用が行われている。

第2節 歴史的環境

田主丸町内の遺跡を中心に各時代についてみていくことにする。

旧石器時代 殖木地区遺跡群A地点・B地点で打製石鏃が、山麓部で細石刃や剥片が採集されている。

縄文時代 千代久遺跡で土器墓が数基調査されている。笹ヶ谷遺跡・千代久遺跡に晩期の土器の散布がみられる。

弥生時代 前期に相当する遺跡に水分遺跡がある。前期末の土器を出土する貯蔵穴、土坑が検出された。このほかに中期・後期の竪穴住居跡、土坑も検出されている。水分遺跡の近隣に所在する日詰遺跡（来年度報告予定）・大的遺跡（現在調査中）でも前期末の土器が出土している。豊城中ツプロ遺跡では前期末から中期初頭の竪穴住居跡が検出されている。また、瑪瑙を材料とした石器が出土しており興味深い。

中期の遺跡としては、浮羽バイパス関係、岡場整備関係の調査が多く行われた船越地区があげられる。まず、船越一ノ上遺跡では中期初頭から末の竪穴住居跡、土坑、溝、小児棺墓が検出されている。船越高原A遺跡では中期後半の竪穴住居跡、土坑、溝が検出された。船越二ノ上遺跡でも前期末、中期後半、後期後半の遺物がわずかずつてはあるが出土している。船越宮ノ前遺跡では中期後半の竪穴住居跡が調査されている。

後期の遺跡として千代久遺跡があげられる。後期から終末期の竪穴住居跡が検出された。

以上、調査が行われた遺跡をみてきた。ほかに、土器の散布が古くから認められ集落等の存在が予想される遺跡に、平遺跡、三明寺遺跡、石垣遺跡、森部遺跡、豊秋遺跡、秋成遺跡、力常遺跡、常盤遺跡がある。また、田主丸町教委が行った遺跡等詳細分布調査の結果、数多くの土器散布地が確認されている。

古墳時代 耳納山麓に分布する、装飾古墳を含む群集墳が特徴的である。矢野一貞著『筑後国史筑後将上軍談』に、1,000基以上の古墳が存在したと報告されているが、果樹園や住宅の造成に伴い多くの古墳が消滅してしまった。現在約300基が確認されている。そのほとんどが直径10m前後の小規模な円墳で、山麓の谷筋、標高40～200mの間に濃密に分布しており、幾つかの古墳群に分けられている。主たるものに麦生古墳群・益生田古墳群・益生田井尻古墳群・益永古墳群・大塚古墳群・大塚清長橋古墳群・森部平原古墳群・森部古墳群・善院古墳群がある。

装飾古墳としては寺徳古墳・中原狐塚古墳・西館古墳が知られる。寺徳古墳は昭和43（1968）年に国の史跡として指定されていたが（昭和61（1986）年に追加指定および一部指定解除）、平成14（2002）年、全長100mを超える前方後円墳であることが確認された田主丸大塚古墳、中原狐塚古墳、西館古墳を追加し、田主丸古墳群と名称を改めている。

古墳時代の遺跡には、大的遺跡（現在調査中）があり、カマド出現期の住居跡が確認されている。また、船越高原遺跡B・C地区では前期と中期の竪穴住居跡が調査されている。前期末から後期までの集落遺跡に船越二ノ上遺跡があり、中期末から後期にかけては船越宮ノ前遺跡が報告されている。殖木遺跡群A地点で前期の土坑が報告されている。同時期の竪穴住居跡が豊城中ツボ遺跡でも調査されている。

古代 『倭名類聚抄』によると筑後国は十郡からなり、田主丸町の大部分は竹野郡（たかのぐん）に相当する。竹野郡は柴刈、二田、竹野、長栖、船越、川会の六つの郷にわかれていた。竹野郡衙は三明寺地区に比定されているが、確証は得られていない。

耳納山地北麓一帯は条里地割がよく残っている地域である。田主丸町では巨瀬川以南が特によく遺存しており、六反田や二ノ坪、東三十六など小字名にもその姿を残している。この条里地割の研究により、荘園の成立や新田開発の様子など興味深い事実が明らかになってきている。

調査された遺跡としては、シメノ遺跡で奈良時代から平安時代の竪穴住居跡、柵列、掘立柱建物があり、船越二ノ上遺跡で10世紀代の土坑や溝が報告されている。

中世 町名となった田主丸は南北朝から史料上に姿をあらわす。貞和6（1350）年11月日付、六箇里（ろくかり）兵庫允通時が在府の足利直冬に、竹野東郷田主丸名など出島屋敷などの地頭職の安堵を求めた文書（池田文書／南北朝遺文2938）が、その初出である。

一方、遺跡名とした松門寺はもう少し古く、鎌倉期から見える地名で、建仁元（1201）年「高良社造營所課匠々田敷注進状」にあらわれるのが初出である。

正応4（1291）年10月日付宇都宮氏所領注文に「筑後岡竹野東郷松門寺」（宇都宮文書／大友史料3）とあり、以後、宇都宮氏は徐々に所領を広げ、文和3（1354）年に松門寺のすべてを領掌したようである。（宇都宮文書／南北朝遺文3726）

しかし、享祿3（1530）年11月12日、大友義隆が松門寺の一部を柞原八幡宮（ゆすはらはちまんぐう）に寄進しており（柞原八幡宮文書／大友史料17）、これをきっかけに松門寺は八幡宮領に

なっていくようである。

遺跡としては、耳納山麓に築造された山城群が目を引く。耳納山地の北側斜面は断層崖であり、急傾斜の山腹に幾筋もの複雑に分岐した尾根が発達している。この尾根上に、麓から山頂にかけてそれぞれの城塞が連続する形で築かれている。

耳納山地は南北朝期に、南朝方の生命線ともいべき存在であった。耳納山地の南側は、南朝方の五条氏の勢力下にあり、同じく南朝方の星野氏は山を越えて大字石垣、益生田などへ進出している。また、肥後には菊地氏があり、彼らは耳納山地を拠点として活動した。

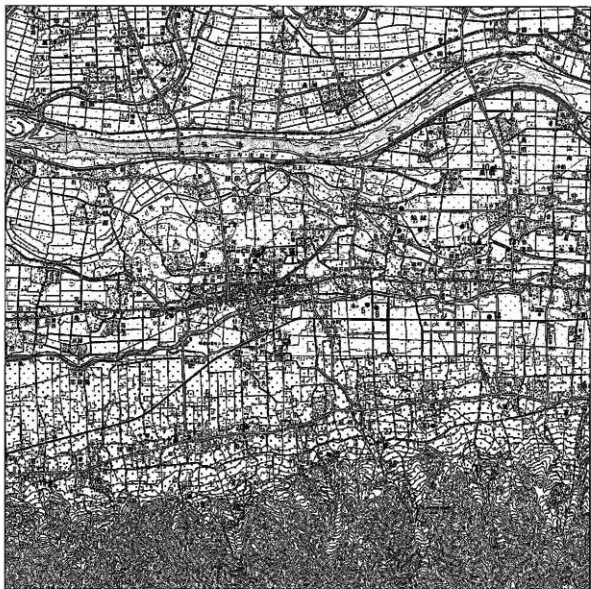
さらに、南北朝動乱後、徐々に大友氏の領国支配が筑後地方に及び始め、星野氏や斐生氏など在地の小領主との間に軋轢が生じ始める。彼ら小領主の拠点もまた耳納山麓であった。

これら山城群は、筑後国最大の荘園竹野庄を含む、広大な水田地帯をめぐる攻防戦の産物である。

この時期の調査された遺跡は少なく、船越高原遺跡で土坑墓が報告されている。

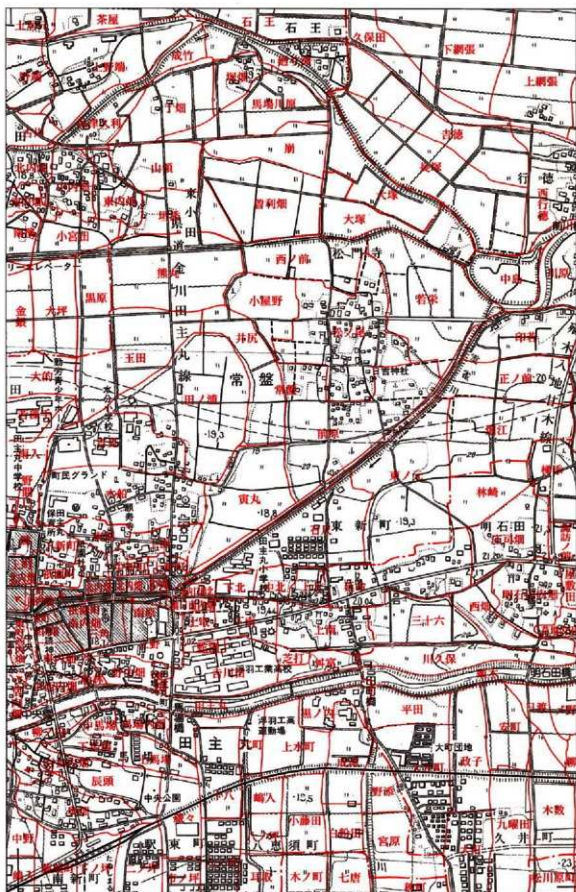
参考文献（浮羽ハイパス関連の報告書は除く。）

『田主丸町誌 第一巻～第三巻』	田主丸町誌編集委員会	1996
『角川日本地名大辞典』40	角川書店	1988
『福岡県市町村要覧 平成13年度版』	(財)福岡県市町村研究所	2001
『田主丸古墳群』	田主丸町文化財調査報告書 第1集	田主丸町教育委員会 1984
『田主丸古墳群』	田主丸町文化財調査報告書 第2集	田主丸町教育委員会 1985
『千代久遺跡Ⅰ』	田主丸町文化財調査報告書 第3集	田主丸町教育委員会 1993
『千代久遺跡Ⅱ』	田主丸町文化財調査報告書 第4集	田主丸町教育委員会 1994
『彌木地区遺跡群 A地点・B地点 鷹取一条遺跡』	田主丸町文化財調査報告書 第5集	田主丸町教育委員会 1996
『西館古墳』	田主丸町文化財調査報告書 第6集	田主丸町教育委員会 1996
『船越一ノ上遺跡』	田主丸町文化財調査報告書 第8集	田主丸町教育委員会 1996
『船越宮ノ前遺跡Ⅰ』	田主丸町文化財調査報告書 第9集	田主丸町教育委員会 1997
『豊城中ツプロ遺跡』	田主丸町文化財調査報告書 第10集	田主丸町教育委員会 1998
『船越宮ノ前遺跡Ⅱ』	田主丸町文化財調査報告書 第11集	田主丸町教育委員会 1999
『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』	田主丸町文化財調査報告書 第12集	田主丸町教育委員会 1999
『田主丸大塚古墳』	田主丸町文化財調査報告書 第15集	田主丸町教育委員会 2001
『寺徳古墳』	田主丸町文化財調査報告書 第18集	田主丸町教育委員会 2001



第1圖 周辺遺跡分布圖 (1/50,000)

- | | | |
|--------------|-------------|-------------|
| 1 松門寺A遺跡 | 12 船越高原A遺跡 | 23 益生田古墳群C群 |
| 2 豊城中ツプロ遺跡 | 13 鷹取五反田遺跡 | 24 益生田古墳群B群 |
| 3 水分遺跡 | 14 鷹取一条遺跡 | 25 大井遺跡 |
| 4 旧田主丸中学校遺跡 | 15 三明寺遺跡 | 26 田主丸大塚古墳 |
| 5 殖木地区遺跡群A地点 | 16 善院古墳群 | 27 大塚古墳群 |
| 6 殖木地区遺跡群B地点 | 17 寺徳古墳 | 28 大塚清長橋古墳群 |
| 7 船越一ノ上遺跡 | 18 西館古墳 | 29 森部平原古墳群 |
| 8 船越宮ノ前遺跡 | 19 麦生古墳群 | 30 森部遺跡 |
| 9 船越二ノ上遺跡 | 20 益生田井尻遺跡 | 31 森部古墳群 |
| 10 千代久遺跡 | 21 益永古墳群 | |
| 11 船越高原遺跡B地点 | 22 益生田古墳群A群 | |



第2圖 調査区周辺字図および条理の復元 (1/10,000)

1. 土坑

1号土坑 (図版2、第4図)

調査区西寄りで検出した円形の土坑。黒褐色土層に切り込む。径1.6~1.8m、深さは0.5mを測る。埋土は、上層が灰褐色土、下層が黒褐色土、灰褐色砂質土、明黄褐色粘質土の混じり。出土土器から中世の遺構である。

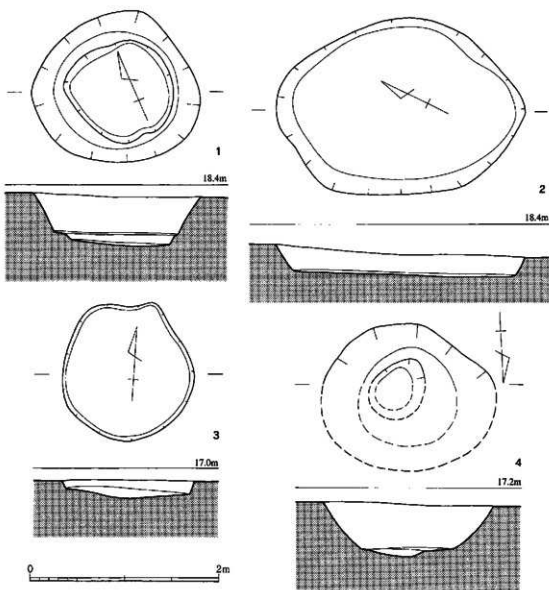
出土遺物 (図版6、第5図)

土師器

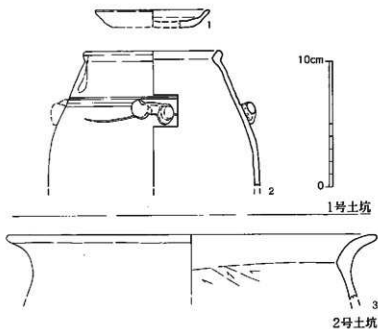
小皿 (1) 口縁部から底部にかけての小片である。摩滅著しく、調整不明。底部切り離し方法も不明である。胎土にはほとんど砂粒を含まない。復元口径8.9cm、器高1.4cm。

陶器

四耳甕 (2) 完存する耳は一つだけだが、この他に一箇所わずかに耳の痕跡が残っており、その



第4図 1~4号土坑実測図 (1/40)



第5図 1・2号土坑出土土器実測図 (1/3)

位置から四耳壺とした。体部上半に二条の沈線と一条の波状の沈線を巡らし、その後を耳を貼り付けている。体部下半は欠失しているが、長頸になるものとおもわれる。口縁部内側に一箇所目跡が残る。内外面とも全面に褐釉を薄くかける。復元口径10.4cm、復元体部最大径16.8cm。

2号土坑 (図版2、第4図)

調査区南端で検出した楕円形の土坑。2号溝より新しい。長径2.6m、短径1.9m、深さは0.2~0.3mを測る。出土遺物は少量である。古墳時代以降であろう。

出土遺物 (第5図)

土師器

壺 (3) 口縁部の小片である。口縁部はヨコナデ、体部外面は摩滅著しく調整不明、内面はヘラ削り。復元口径29.0cm。

3号土坑 (第4図)

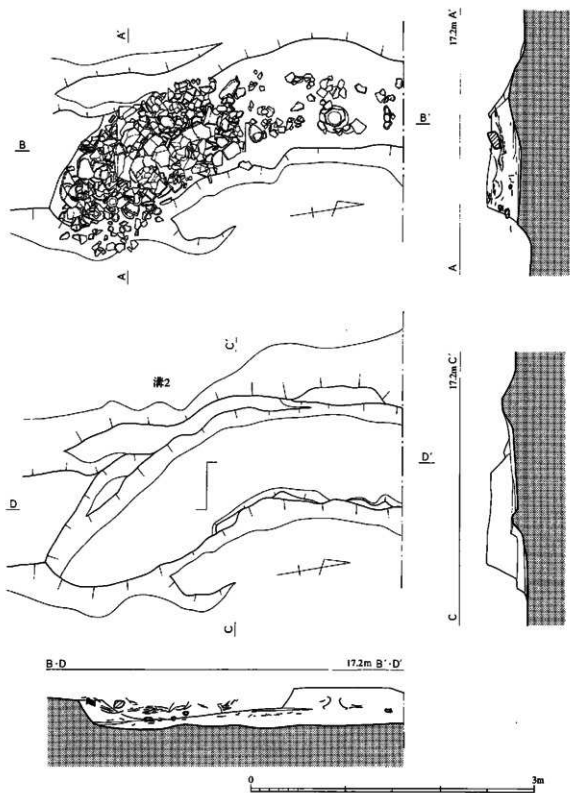
調査区やや西寄りで検出した円形土坑。旧河道より新しい。径1.4m、深さ0.2mを測る。出土遺物は摩滅著しい土器の小片1点のみで、時期の特定は難しい。旧河道埋没後に掘られているので10世紀以降であろう。

4号土坑 (図版2、第4図)

調査区南端で検出した土坑。遺構検出時には検出し得ず、調査区南壁の土層観察時に存在が判明する。やや歪んだ円形になるものとおもわれる。残存部分で、幅1.4m、深さ0.4~0.6mを測る。埋土は灰色砂質土。遺物は弥生土器と土師器の小片が出土しているが、図示し得るものはない。古墳時代以降であろう。

5号土坑 (図版3・4、第6図)

調査区北端で検出した廃棄土坑。2号溝と旧河道にきられる。2号溝と旧河道に大部分を削られており、南端1.2mほどの部分しか本来の姿をとどめていない。調査区を拡張してその形状の把握に努めたが、北端は確認できず不明のままである。検出段階では、旧河道の水際土層に土器が廃棄されたものと考えていたが、土層を観察すると、ごく僅かではあるが立ち上がり確認できたため、旧河道とは別の遺構であることが判明した。ここでは土坑として報告するが、幅のわりに長さが長い



第6圖 5号土坑実測圖 (上:土器出土状況) (1/40)

ことから、溝の可能性もある。本遺跡中で、時期が確実におさえられる数少ない遺構のひとつで、後期中ごろである。

出土遺物（図版6・7、第7～13図）

弥生土器

甕（1～18） 1・2は小型の短頸甕である。1は摩滅が著しく、口縁部のヨコナデ調整以外は不明。復元口径は13.7cm。

2は口縁端部をくぼめるように仕上げる。摩滅が著しく、体部内外面にわずかにハケメが残る。復元口径13.8cm、復元体部最大径17.2cm。

3は無頸甕である。摩滅が著しく外面の調整は不明瞭だが、わずかにミガキ仕上げしたことがわかる。内面はハケメ調整。復元口径8.0cm、復元体部最大径15.1cm。この体部が算盤玉状に張る無頸甕は、北部九州では広くみとめられる器種ではない。塚堂遺跡¹⁾（吉井町）、赤幡森ヶ坪遺跡²⁾・1・双遺跡³⁾（築城町）、三雲寺口遺跡⁴⁾（前原市）に類似がある。佐護内岳遺跡⁵⁾（長崎県）でも出土しているが、形態的には類似するものの弥生式土器ではなく、漢式土器と報告されている。このうち3と形態が最もよく似るのは赤幡森ヶ坪遺跡8号溝出土の甕である。これら類例を参考にすれば、底部は凸レンズ状の底になるものとおもわれる。

4・5は袋状口縁甕、6～11は複合口縁甕である。

4は稜線をもつ袋状口縁である。外面はハケメ調整。口縁部付け根から放射状にハケメを施す。口縁部内面には指頭痕が残る。残存部分にはハケメはみられず、ナデで仕上げたとおもわれる。復元口径19.7cm。

5もまた、稜線をもつ。外面はハケメ調整。内面は摩滅して調整は不明瞭だが、わずかにハケメと指頭痕が確認できる。復元口径23.0cm。

6は頸部下端が太くなりそうである。9・10と口縁部がよく似るので、頸部の形状もまた近いだろう。口縁部は摩滅して、指頭痕が残る以外は調整不明。頸部内外面はハケメ調整。復元口径19.2cm。

7・8は口縁端部をつまみ出すように角張らせ、口縁部と頸部の径の差が大きい。口縁部はヨコナデ、指頭痕が残る。頸部は内外面ともにハケメ調整。復元口径は7が27.2cm、8が29.2cm。

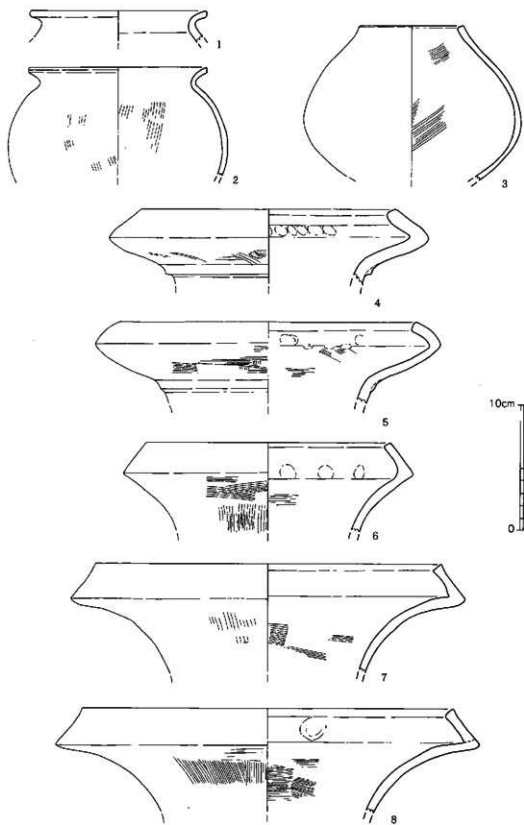
9・10は頸部が直接外反し、径も太い。9は口縁部外面がハケメ調整、内面ヨコナデで、指頭痕が残る。頸部・肩部は内外面ともに丁寧なハケメ調整。体部をハケメ調整した後に三角形凸帯を貼り付け、頸部のハケメ調整を行っている。復元口径19.2cm。

10は摩滅著しく、調整は不明瞭。口縁部内面に指頭痕が残り、頸部の内外面はハケメ調整。9とよく形状が似るので、頸部下端に三角形凸帯をもつとおもわれる。復元口径21.2cm。

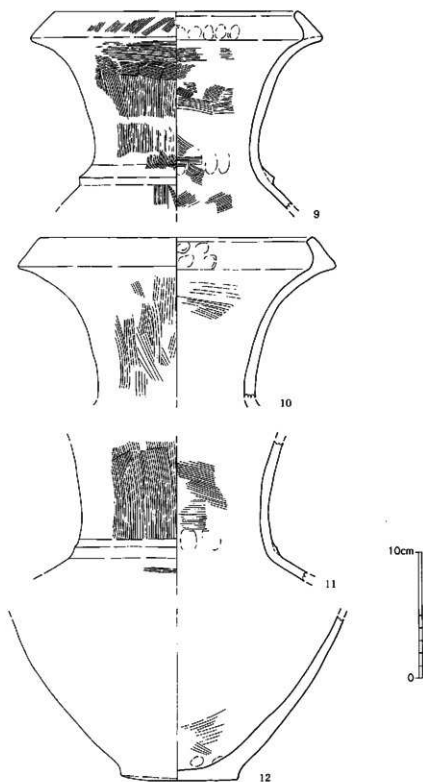
11は口縁部を欠失しているが、形状が9・10とよく似るので、同様の口縁部を持つとおもわれる。頸部は内外面ともに丁寧なハケメ調整、肩部外面はハケメ調整、内面は摩滅して不明。

12～14は甕の底部である。12の体部外面は摩滅が著しいが、ハケメ調整したことがかろうじてわかる。内面はハケメ調整。底部外面は調整不明、内面はユビオサエ。復元底径9.2cm。

13・14は体部中ほどに、刻み目を施す断面台形の凸帯をもつ。13は凸帯のすぐ上が最大径になるとおもわれる。体部は内外面ともにハケメ調整、底部は内外面とも摩滅して調整不明。底部から体部にかけて黒斑あり。復元底径8.7cm。



第7图 5号土坑出土土器实例图① (1/3)

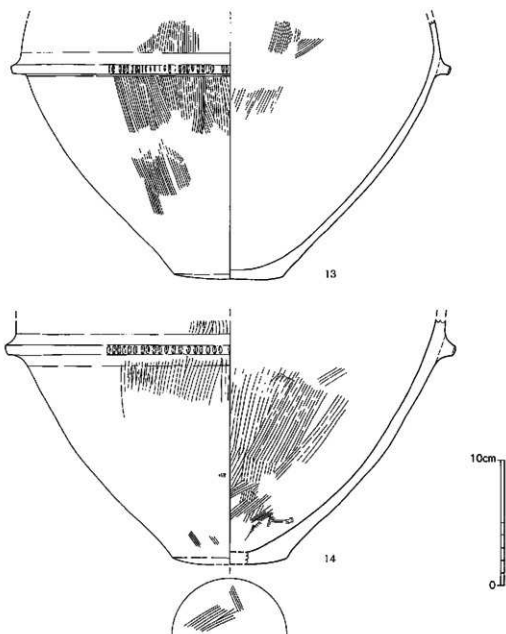


第8图 5号十坑出土土器夹测图② (1/3)

14は体部・底部の内外面ともにハケメ調整。凸帯より下の部分は凸帯貼り付け後にハケメ調整を施している。復元底径9.0cm。

15は口縁部を欠失する。5と胎土や色調がよく似ており同一個体かとおもわれたが、体部に対して口径が大きすぎるので、別個体として報告している。底部は平底で端部が丸みを帯びている。外面はハケメ調整である。内面は工具による擦過で仕上げている。体部内面上方には指頭痕が多く残る。復元底径6.3cm。復元体部最大径27.7cm。

16は袋状口縁壺で、ほぼ完形である。丸みをもった袋状口縁で頸部が短い。底部は平底で端部が丸みを帯びている。口縁部は摩滅して調整不明。頸部・体部は内外面ともにハケメ調整。底部外面は摩滅のため調整不明、内面はユビオサエ。断面三角形凸帯、台形凸帯はいずれもハケメ調整後



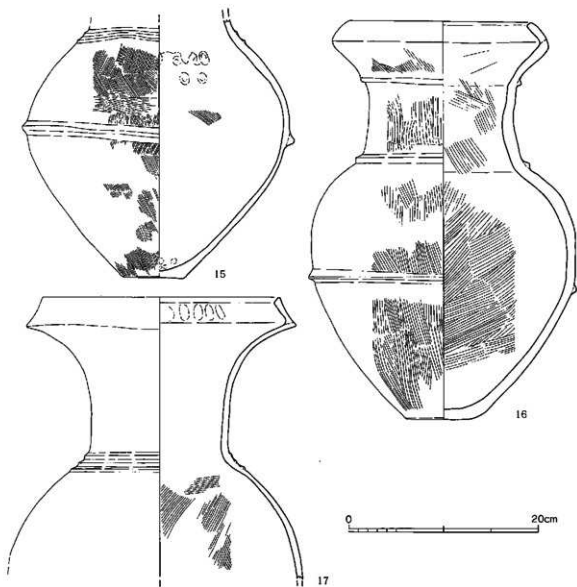
第9図 5号上坑出土土器実測図③ (1/3)

に貼り付けている。口径19.1cm、体部最大径28.2cm、底径6.8cm、器高42.5cm。本土坑出土の壺の中で最も古相である。

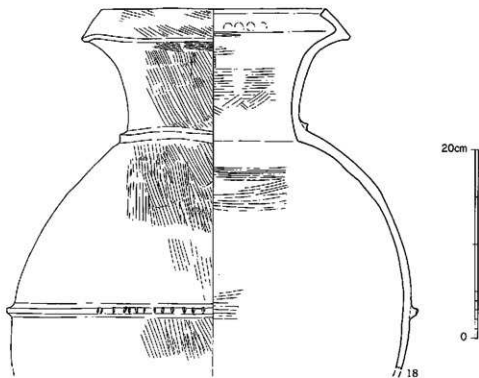
17は口縁部が7・8と同様の形状である。口縁部から頸部にかけては摩滅著しく、調整不明。指頭痕がわずかに残るのみである。体部は内外面ともにハケメ調整。復元口径24.8cm。

18の口縁部は屈曲部が鈎状に厚みをもつ。頸部は短く、直接外反する。やや歪んでいるが、体部に張りがあるのが特徴的である。口縁部内面はヨコナデで、指頭痕が残る。他の部分は内外面とも粗いハケメ調整である。口径23.7cm、復元体部最大径53.6cm。

壺 (19~24) 19は口縁部を欠失する小型の壺である。体部最大径は体部中位になる。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ調整。体部・底部の外面もハケメ調整だが、底部との境付近はナデ調整している。内面は粗いハケメ調整。口径17.8cm、体部最大径19.3cm、底径7.1cm、器高23.6~24.1cm。



第10図 5号土坑出土土器実測図④ (1/4)



第11圖 5号土坑出土土器実測図⑤ (1/4)

20は口縁部を欠失する。体部最大径は中位よりやや下になる。体部内外面ともハケメ調整。底部内面はユビオサエ。底径8.0cm。体部最大径17.2cm。

21は口縁端部をくぼめるように仕上げる。口縁部外面はヨコナデ、他の部分はハケメ調整。復元口径25.0cm。

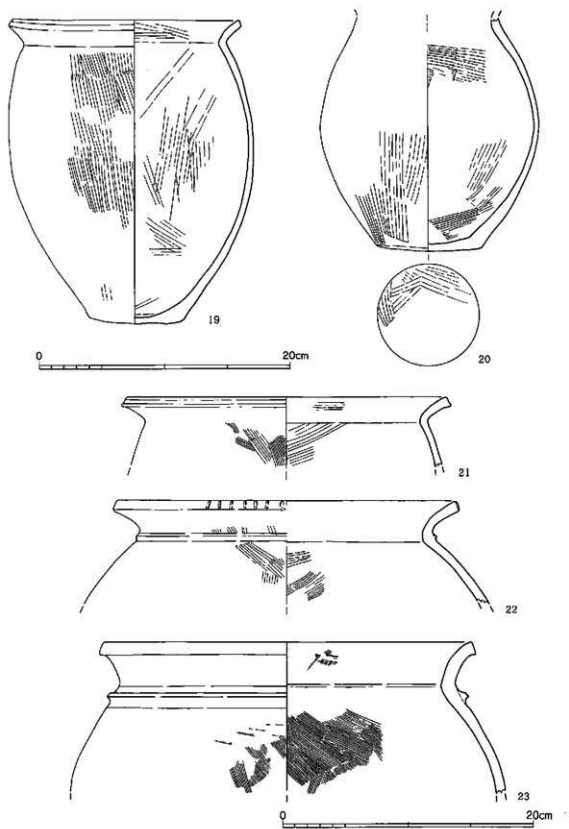
22は口縁端部に刻み目を施す。全体に摩滅して不明瞭だが、口縁部外面はヨコナデ、体部内外面はハケメ調整する。復元口径35.7cm。

23は口縁端部を下方につまみ出すように仕上げ、口縁部付け根に断面台形の凸帯を巡らす。口縁部外面、体部内面屈曲部はヨコナデ、他の部分は丁寧なハケメ調整。復元口径38.8cm。

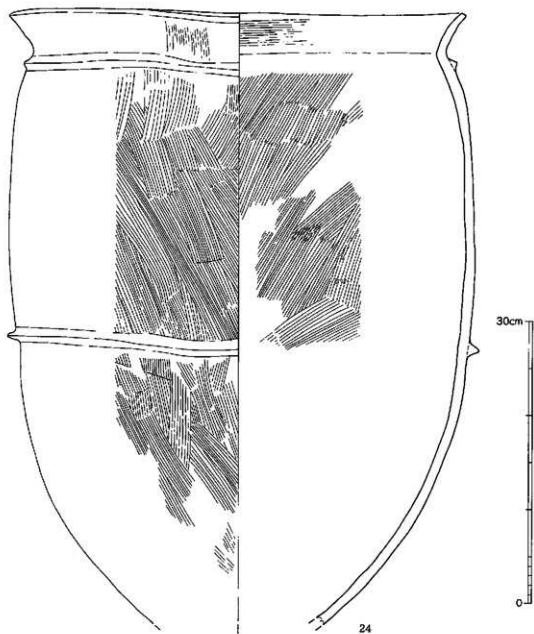
24は大型の甕で、底部を欠失している。体部は張りがなく、最大径は中位になる。口縁部、三角凸帯とも歪んでおり、全体につくりが粗雑な印象である。体部内面下半は摩滅して調整は不明だが、他の部分はハケメ調整である。体部に2箇所、口縁部内側に1箇所黒斑がある。口径47.5cm、体部最大径49.9cm。

この他に土製品が出土している。

- 註 1) 『塚堂遺跡Ⅰ』浮羽ハイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会 1983
 2) 『椎田ハイパス関係埋蔵文化財調査報告(8) 中巻 赤穂森ヶ坪遺跡』福岡県教育委員会 1992
 3) 『椎田ハイパス関係埋蔵文化財調査報告(8) 下巻 十双遺跡』福岡県教育委員会 1992
 4) 『二雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集 福岡県教育委員会 1983
 5) 後藤守一「対馬管見録(その二)」『考古学雑誌』13-3 1922



第12圖 5号上坑出土土器実測図⑥ (1/3、23は1/4)



第13図 5号土坑出土土器実測図㉗ (1/4)

2. 溝

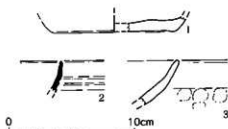
1号溝

調査区西寄りで検出した南北溝である。幅0.2~0.3m、深さは最深部で0.24mを測る。埋土は灰褐色砂質土。出土土器は少量かつ、小片である。埋土および出土土器から、中世であろう。

出土遺物 (図版7、第14図)

土師器

坏 (1) 底部小片である。摩滅が著しく、内面の調整は不明。糸切り離し。胎土は精良。復元底径10.0cm。



第14図 1号溝出土土器実測図 (1/3)

須恵器

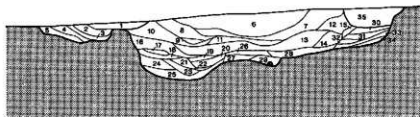
高坏 (2) 口縁部小片である。凹縁を2条めぐらす。胎土は精良で、焼成は堅緻。

瓦器

椀 (3) 口縁部小片である。滑縁が著しく、外面にわずかに指頭痕が残るのみで、内外面とも調整は不明。胎土は精良。

溝2 A

17.2m A'



土層名

① 灰褐色砂 (鉄分含む)

② 灰褐色砂

③ 灰褐色土と灰褐色砂のまじり

④ 暗褐色土と磁器のまじり

⑤ 灰褐色砂

⑥ 灰褐色粘質土 (鉄分含む、由べらト並層の⑥層と同一)

⑦ 灰褐色粘質土 (鉄分含む)

⑧ 褐色砂 (鉄分含む)

⑨ 褐色粘土 (鉄分含む)

⑩ 褐色砂 (鉄分含む)

⑪ 褐色砂、灰褐色粘土、明褐色粘土、暗褐色粘土のまじり

⑫ 暗褐色粘土と褐色砂と灰褐色砂の互層

⑬ 暗褐色砂、灰褐色砂、灰褐色粘土、暗褐色粘土と磁器のまじり

⑭ 灰褐色砂

⑮ 暗褐色粘土 (鉄分含む)

⑯ 灰褐色砂 (鉄分含む)

⑰ 暗褐色粘質土、暗褐色粘土のまじり

⑱ 褐色砂 (鉄分含む)

⑲ 暗褐色粘土 (暗褐色粘土を含む)

⑳ 暗褐色粘土と褐色砂のまじり

㉑ 暗褐色砂

㉒ 暗褐色粘土

㉓ 暗褐色砂

㉔ 暗褐色粘質土

㉕ 暗褐色粘土

㉖ 暗褐色砂、褐色砂、灰色砂の互層

㉗ 暗褐色粘土、暗褐色粘土、暗褐色粘土、暗褐色粘土のまじり

㉘ 暗褐色砂、暗褐色粘土

㉙ 暗褐色砂、暗褐色粘土、暗褐色粘土、暗褐色粘土の互層 (暗褐色粘土を含む)

㉚ 暗褐色砂、暗褐色粘土

㉛ 暗褐色粘土 (暗褐色粘土を含む)

㉜ 暗褐色砂 (暗褐色粘土を含む)

㉝ 暗褐色粘土 (暗褐色粘土を含む)

㉞ 暗褐色砂

㉟ 暗褐色粘土 (土器、磁器含む)

B

17.3m B'



土層名

① 茶褐色粘質土 (磁器、鉄分を含む)

② 暗褐色粘土

③ 暗褐色粘質土

④ 暗褐色粘土 (磁器、黄褐色粘土を含む)

⑤ 暗褐色粘土 (黄褐色粘土を含む)

⑥ 暗褐色粘土 (茶褐色粘土を含む)

⑦ 灰褐色砂

溝5 C

17.5m C'



土層名

① 灰色粘質土

② 暗褐色粘質土

③ 茶褐色粘質土

溝6 D

17.6m D'



土層名

① 暗褐色粘質土

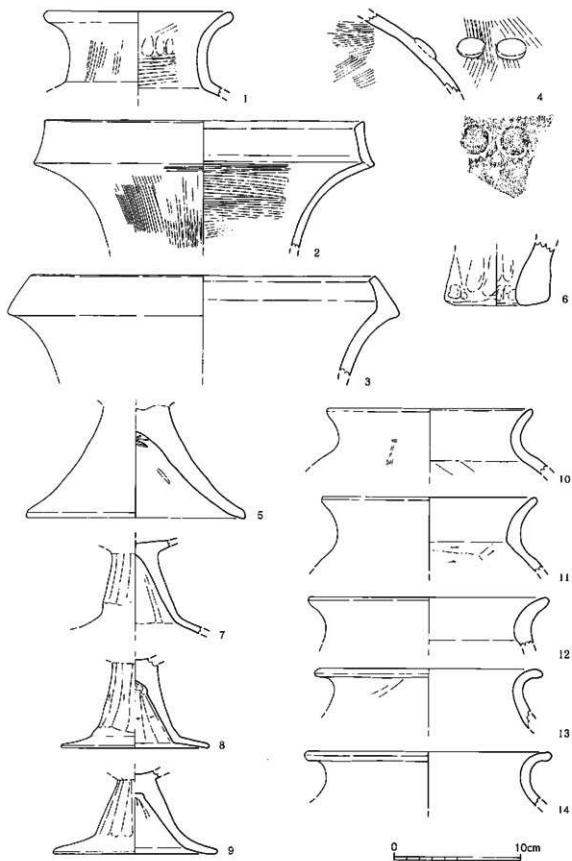
(鉄分粒、径1~5cmの礫を含む)

② 暗褐色土

(やや粘質、径1~5cmほどの礫を多量に含む)



第15図 2-6号溝土層断面図 (1/20)



第16图 2号清出土陶器刻图①(1/3)

2号溝 (図版4、第15図)

調査区西寄りで検出した南北溝である。地形に沿って西に振れる。台地の縁辺に沿って掘削されたものと思われる。掘削を始めてから2条の溝が重なっていたことが判明したが、出土遺物を区別できなかった。埋土はおおよそ灰褐色砂と灰色粘質土の互層である。幅1.3~2.5m、深さ0.3~0.4mを測る。出土遺物には弥生土器も含まれるが混入品で、古墳時代中期に掘削され、7世紀初頭までに埋没したものとかがえる。

出土遺物 (図版7、第16~18図)

弥生土器

壺 (1~4) いずれも北寄り、5号土坑付近から出土しており、混入品である。

1は小型の広口壺の小片である。口縁部から頸部にかけて、内外面ともにハケ目調整。頸部内面に指頭痕が残る。復元口径14.4cm。胎土の質、色調は2・3に非常によく似る。

2・3は複合口縁壺で、直接外反する頸部がつくであろう。2は頸部内外面ともにハケ目調整、口縁部はヨコナデで仕上げる。復元口径25.0cm。

3は摩滅著しく内外面とも調整は不明。復元口径26.9cm。

4は肩部小片である。径4.5cmほどの円形の浮文を配置する。複合口縁壺になるとおもわれる。胎土や色調から2と同一個体の可能性がある。塚堂遺跡¹⁾(古井町)D地区11号周溝から、肩部に2個の円形浮文をもつ複合口縁壺の完形品が出土している。

高坏 (5) これも混入品である。摩滅著しく、内外面ともに調整は不明。内面に工具痕と思われる傷と、絞り痕がわずかに残る。復元裾部径17.3cm。

支脚 (6) 同じく混入品である。支脚の裾部になるとおもわれる。内外面ともに指頭痕が多く残り、調整は行っていない。復元裾部径8.2cm、復元孔径2.7~2.9cm。

土師器

坏 (25・26) どちらも口縁部の小片である。摩滅著しく、外面は調整不明。内面はわずかにヘラミガキ痕が残る。胎土はほとんど砂粒を含まない。

25の口縁部外面から内面は黒色である。26の復元口径は16.0cm。

高坏 (7~8) いずれも、裾部が屈曲して大きく外に開く。深めで外面の屈折痕が不明瞭な坏部がつくとおもわれる。摩滅が著しく、外面はタテ方向に面取りされたことがわかるだけで、調整は不明である。内面もやや摩滅しているが、ヘラ削りしていることがわかる。復元裾部径は8が11.7cm、9が13.0cm。脚部高は8が6.7cm、9が6.0cm。

壺 (10~15) 口縁部の形状で二分できる。10~12は口縁部が比較的直線に近く、13~15は極端に外方に屈曲する。

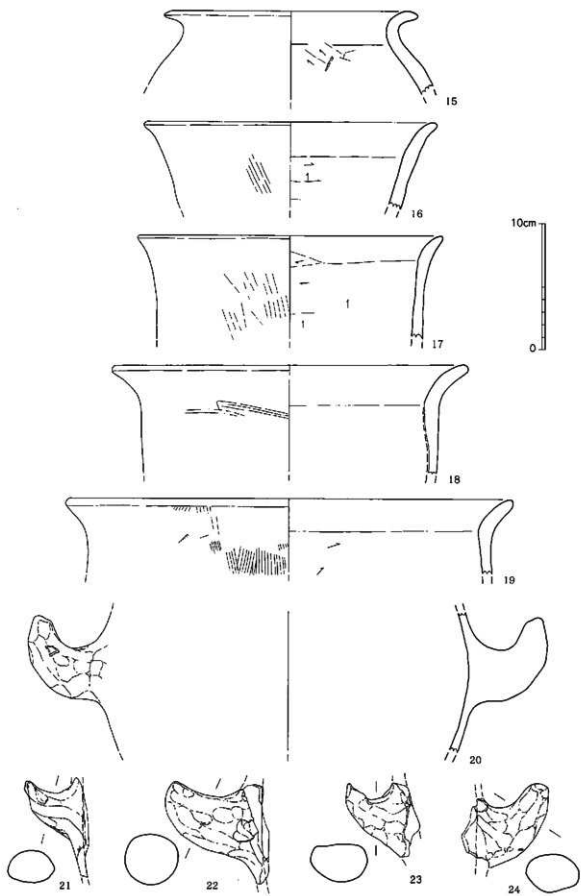
10は内面の口縁部と体部の境目にはっきりした稜をもたない。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面ハケ目調整、内面ヘラ削り。口縁部が亦変している。復元口径16.0cm。

11は摩滅が著しく、体部内面のヘラ削り以外は調整不明。復元口径16.7cm。

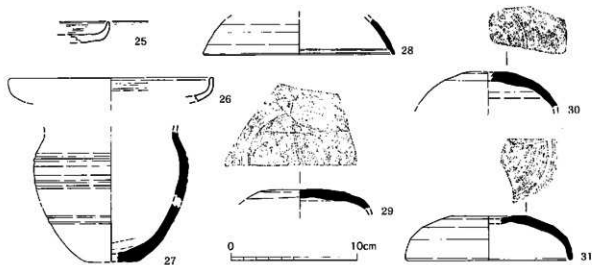
12は摩滅著しく調整不明。復元口径18.8cm。

13は摩滅著しく調整は不明だが、口縁部外面に工具のあたり痕が残る。口縁部が亦変している。復元口径17.0cm。

14は口縁部を丸く肥厚させている。内外面ともヨコナデ。復元口径19.6cm。



第17图 2号洞出土土器尖刺图② (1/3)



第18図 2号清出土土器実測図③ (1/3)

15は内面の口縁部と体部の境がはっきりしない。体部内面のヘラ削り以外は調整不明。

甗 (16~24) 16は体部と口縁部の境が不明瞭で、裾部に向かってすぼまる。口縁部ヨコナデ、体部外面はハケメ調整、内面はタテのちヨコ方向にヘラ削り。復元口径22.4cm。

17はまっすぐ立ち上がる胴部から口縁部がやや外方に開く。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整、内面はタテ後ヨコ方向にヘラ削り。復元口径23.7cm。

18・19は口縁部の開きがより大きくなる。18は摩滅著しいが、外面の一部にハケメがみとめられる。復元口径27.4cm。19の外面は口縁端部直下からハケメ調整し、のち口縁部をヨコナデで整える。体部内面はヘラ削り。復元口径34.7cm。

20は体部が丸みを帯びている。全体に摩滅著しく、体部外面の調整は不明。体部内面はヘラ削り。把手部分は指ナデだが、内側にヘラ削りしたような痕跡がある。

21~24は把手部分である。いずれも全面指ナデで仕上げる。

須恵器

ジョッキ形土器 (27) 口縁部を欠失する体部片と体部から底部にかけての小片である。体部片から径を割り出し、底部はそれに傾きを合わせた。残存部分に把手の痕跡はなく、壺形になる可能性もある。体部は内外面ともヨコナデで仕上げ、外面に4条のつまみだしによる三角凸帯を巡らす。底部外面はナデ、内面も強いナデで仕上げる。胎土には細砂と若干の粗砂を含む。焼成は堅緻。

甗 (28~31) 28は口縁端部に段をもつ。胎土は細砂粒を含むものの精良。復元口径15.0cm。

29~31は天井部にヘラ記号をもつ。29は天井部内面にナデを施さない。天井部外面に灰を被り、胎土に粗砂を多く含む。

30も天井部内面にナデを施さない。

31は復元口径12.8cm、器高3.0cm。

この他に土製勾玉、土鏃、その他土製品、石庖丁、砥石、その他石製品が出土している。

3号溝 (第15図)

調査区東寄りで検出した南北溝である。4号溝、旧河道にきられる。幅1.0m、深さ0.15mを測る。遺物は、土器が少量出土しているが、小片かつ摩滅が著しく図示し得ない。その中で注意されるのが、2.5cmほどの土師質の小片である。外面が赤変、内面が黒変しており、高温にさらされたのは確かである。製塩土器、あるいは鍛冶関連の製品とおもわれる。遺構の時期の特定は難しいが、旧河道との関係から古墳時代以前であろう。

4号溝 (第15図)

調査区東寄りで検出した南北溝である。3号溝より新しく、旧河道にきられる。幅0.35~0.55m、深さ0.15mを測る。出土遺物はごく少量かつ小片で、図示し得ない。遺物から時期を特定することはできないが、旧河道との関係から古墳時代以前であろう。

5号溝 (第15図)

調査区東端で検出した南北溝である。台地の落ち際に沿うようにのびる。出土遺物はごく少量かつ小片のため、図示し得ない。遺構の切り合い関係もないため、時期の特定は出来ない。

6号溝 (第15図)

調査区東端で検出した南北溝である。この溝から東は礫層が露出している。幅0.8~1.5m、深さ0.15mを測る。近世以降とおもわれる。

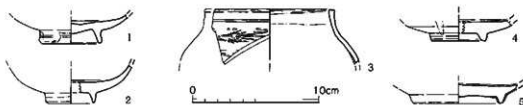
出土遺物 (図版7、第19図)

陶器

小皿 (1) 底部片である。整形はヘラ削り、高台も削りだしている。外面は体部に施釉、一部高台に垂れる。内面は施釉後、蛇の目様に釉を掻き取る。見込みと高台登付きに目跡が残る。釉は黒色から茶色を呈する。胎土は灰色みがかかった褐色である。復元高台径4.6cm。

小椀 (2) 1よりも立ち上がりが急なので椀とした。底部片である。ヨコナテ整形。外面は体部と高台内側に施釉。内面は施釉後、釉を蛇の目様に掻き取る。釉は、体部外面があめ色、内面と高台内側は青みがかかった白色を呈する。胎土は灰色みを帯びた白色。復元高台径3.5cm。

小壺 (3) 壺としたが、花瓶の可能性もある。肩部に粘土の貼り付け痕があり、耳がついていたとおもわれる。ヨコナテ整形。体部外面は全面に明るい青色の釉をかけ、白色の不透明釉で文様を描く。口縁端部は釉をふき取っており、いわゆる口禿げになっているが、一部釉の取り残りが残る。内面は口縁からやや下がったところから無色の透明釉を薄く施釉する。胎土は白黄褐色で、ごく少量の細砂を含む。復元口径10.1cm。



第19図 6号溝出土土器実測図 (1/3)

磁器

椀(4・5) 4の体部外面はヘラ削りし、高台も削り出しである。外面は露胎で、一部軸の垂れがみられる。内面は全面施軸し、蛇の目様に軸を掻き取る。軸は灰緑色を呈し、薄くかかる。胎上は黄灰褐色で、粗い。復元高台径4.2cm。

5は、内外面とも全面に施軸する。高台内側の軸を掻き取るが、底部中央に少量の軸が残る。軸は灰緑色を呈し、厚くぼつりとかかる。胎土は灰白色で、やや粗い。復元高台径7.0cm。

註1)『塚堂遺跡Ⅳ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集 福岡県教育委員会 1985

3. 旧河道 (図版5、第20～23図)

調査区はほぼ中央を北流し、幅約54mと調査区の大部分を占める。湧水が激しいので完掘していないが、最深部は1m以上になる。

土層を概観してみると、灰褐色、青灰色、黒灰色の粘土層と、灰茶褐色、茶褐色の粘土と微砂の混合層、茶褐色、淡灰色の砂層、小礫と粗砂の混じった層が交互に堆積している。時には激しく、時には穏やかに、流路をすこしずつ変えながら長期にわたって流れつづけたことがわかる。

以下、時代をおって流路の変遷の様子を述べるが、流路の位置の説明には、土層図中西から1mごとにふった番号を用いる。また、出土地点を特定できる遺物は、第20図中に番号を入れている。

出土遺物中最も古いものは縄文土器であるが、これはごく少量で摩滅が著しいため、山麓部から流れてきたもので周辺に縄文時代の遺跡が存在するとは考えにくい。また、旧河道の時期の上限を示すものでもない。

弥生時代の遺物を含む流れは、中央土層最下層と調査区北壁土層の27～45間の最下層である。土層からは、この二つの流れの先後関係は確定できない。しかし、前者出土土器はあまり摩滅しておらず、折り重なるようにまとまって出土したこと、一方で後者出土土器は小片で摩滅が著しいことから、前者が弥生時代後期頃の流路とおもわれる。出土土器と土層の観察から、この後7世紀初頭頃まで、北壁57・南壁40以東に流路があったものとかんがえられる。

その後流路は方向を変え、北壁34～45間を南東から北西方向に流れる。再び方向が変わり、今度は調査区ほぼ中央を南西から北東に流れる。これは出土土器から奈良時代にあたる。9世紀以降になると、流路は北壁18～24間に移り、10世紀ごろの黒色土器を含む層を最後に埋没する。中世にはすでに平地化していたものとかんがえている。

また、北壁72・南壁79以東に非常に安定した状態の層があり、流路が西へ移動した後、東から徐々に地山化したようである。第20図は地山化した後の旧河道東岸を実測している。

出土遺物 (図版7～10、第24～29図)

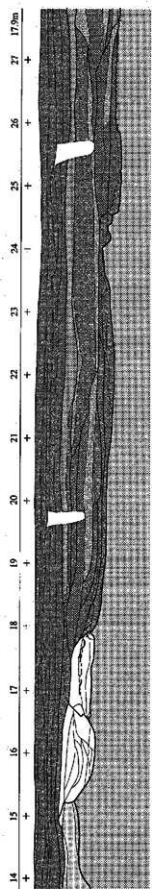
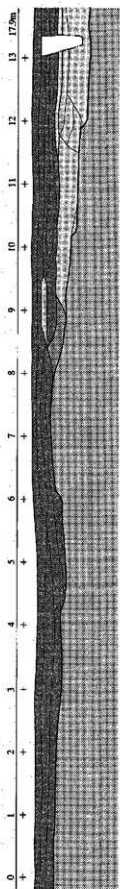
縄文土器

鉢形土器 (1～6・8) 1は先端が口唇部のようにもみえるが、不明。内外面ともかなり摩滅しているが、ナデ調整。後期である。

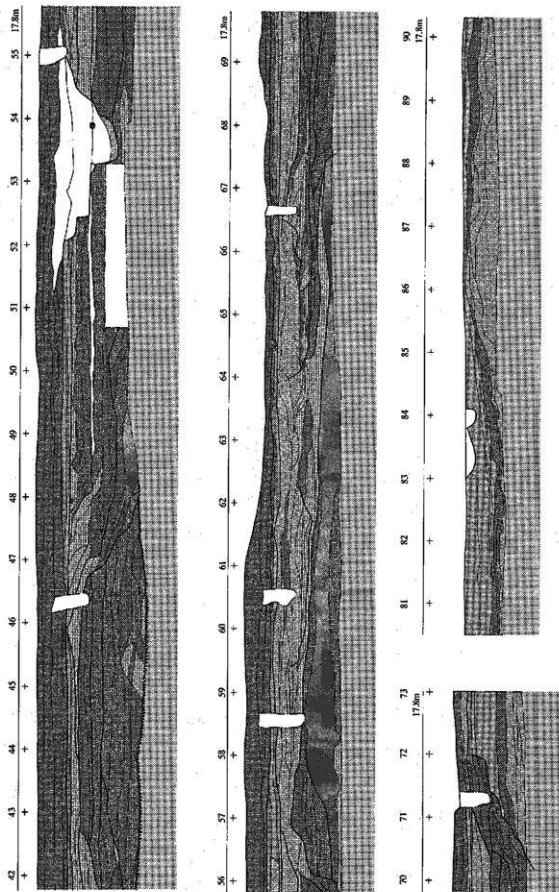
2は粗製土器の口唇部小片である。内外面ともナデ調整。後期である。

3は粗製土器の体部小片である。外面に沈線を巡らす。摩滅して不明瞭だが、内面には条痕とおもわれる痕跡がある。後期である。

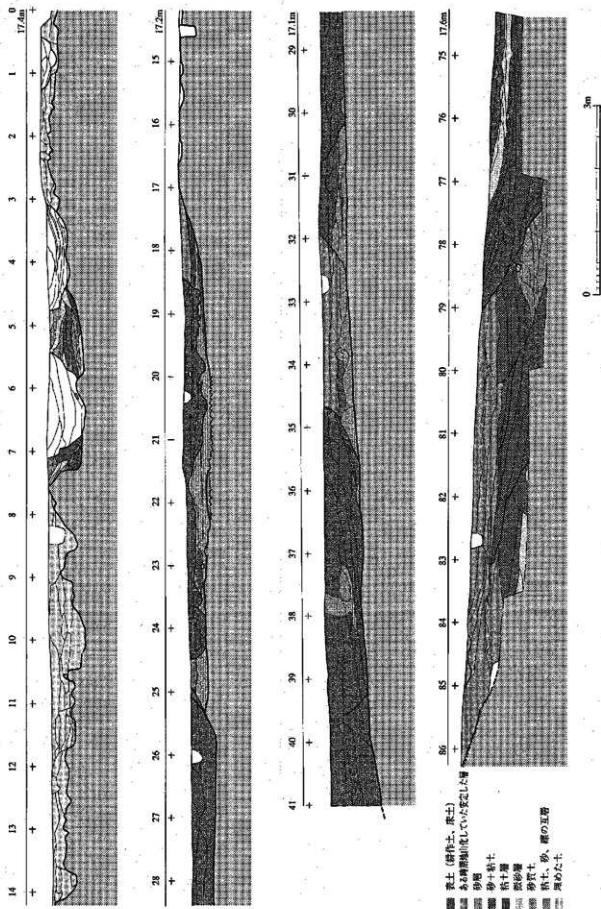
4は粗製土器の体部小片である。内外面ともナデか。後期か。



第21图 调查区北崖土质剖面图(1/60)



第22图 调查区北东土崩剖面图② (1/50)



第23図 潮見区潮見土層横断図 (1/50)

5は半粗製の鉢形土器小片である。内外面ともナデ。後期か。

6は粗製土器の口唇部である。口唇部はオサエによる窪みを連続させ、波状につくる。外面はナデ、内面には条痕が残る。復元口径28.2cm。後期前葉に属する。

8は精製で、浅鉢になるとおもわれる。外面はミガキ調整で、口唇部直下に沈線を巡らす。内面はミガキ調整で、口唇部直下に凹線を巡らす。体部内面はナデ。復元口径21.4cm。晩期前半に属する。

壘形土器 (7) 底部である。内外面ともナデ調整だが、外面屈曲部はオサエ気味のナデ調整で、指頭痕が残る。底径9.7~10.0cm。晩期に属する。

弥生土器

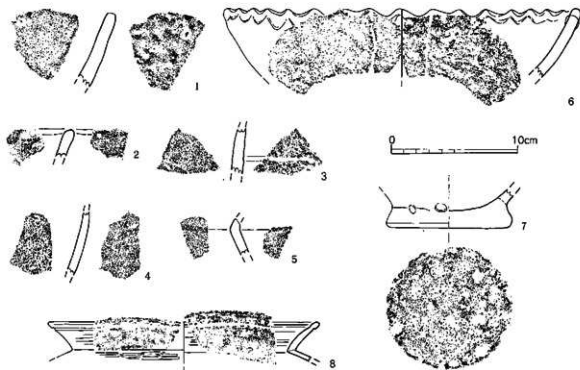
壘 (9~14) 9は逆「L」字状口縁の壘である。摩滅著しく調整不明。復元口径24.0cm。

10・11は口縁部をやや厚めにつくり、屈曲部を強くヨコナアする。10は、口縁部外面はヨコナデ、他の部分はハケメ調整。屈曲部には内外面とも指頭痕が残る。復元口径22.0cm。11は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともにハケメ調整。復元口径27.0cm。

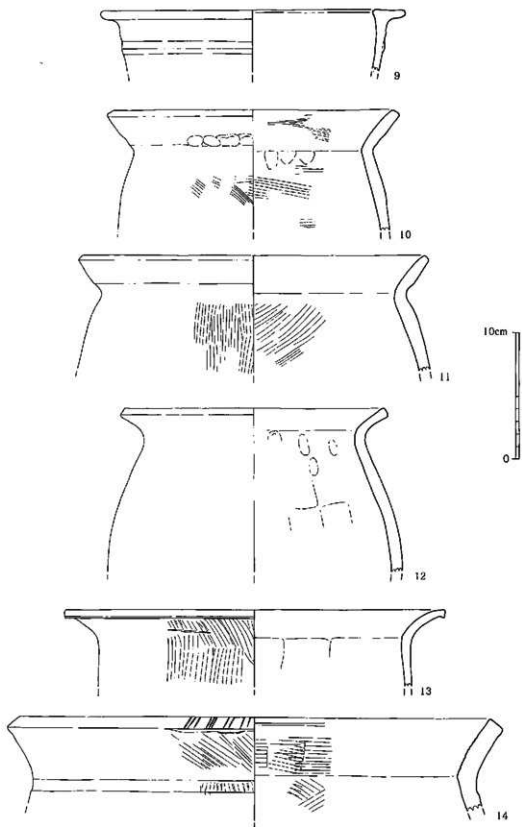
12は口縁端部をつまみ出し気味に角張らせる。体部の最大径は体部中位になる。摩滅著しく調整不明。体部内面に指頭痕がわずかに残る。体部外面中位に被熱して赤変、器壁が剥離している。復元口径20.4cm。

13は口縁端部を下方につまみ出すように仕上げる。内面に稜はなく、体部は張らない。外面はハケメ調整、内面は摩滅して調整不明。復元口径30.0cm。

14は器壁が厚く、やや大型である。口縁部と体部の境に貼り付けていた凸帯が剥離している。



第24図 旧河道出土土器実測図① (1/3)



第25圖 旧河遺出土器実測図② (1/3)

内外面ともにハケメ調整。口縁部の刻み目は浅いが、口縁部内面は強くハケメ調整されている。復元口径39.0cm。

甕 (15~18) 15は稜線をもった袋状口縁甕である。内面に指頭痕が残る。内外面とも、ヨコナデないしナデ調整である。復元口径20.0cm。

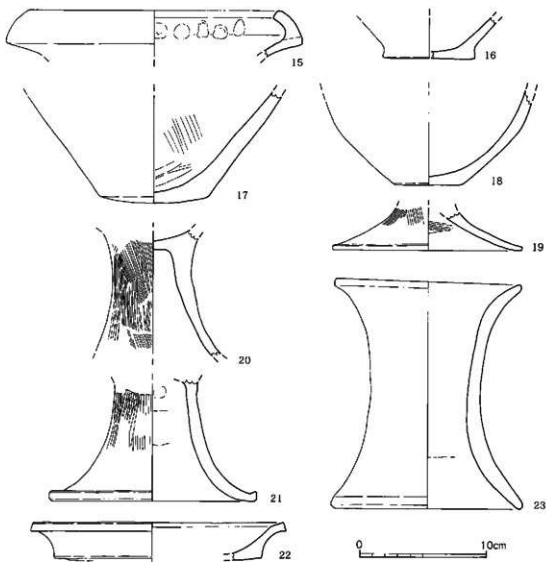
16は、ここでは小型の壺の底部としているが、甕の可能性もある。摩滅が著しいが、底部にわずかにハケメが残る。復元底径7.2cm。

17は、体部外面は摩滅著しく調整不明、底部はわずかにハケメが残る。内面は体部がハケメ調整、底部はユビナデで仕上げる。復元底径8.4cm。

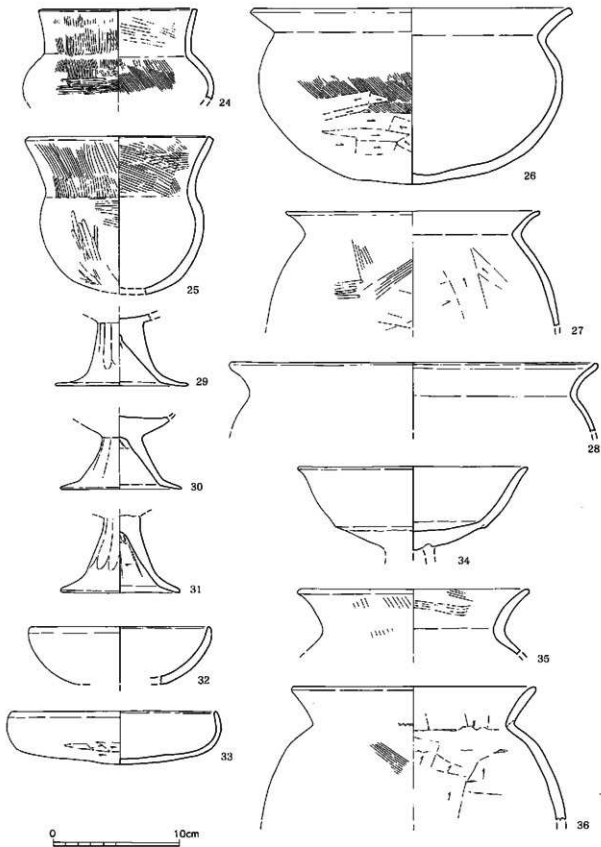
18は小型の壺にならう。摩滅著しく調整不明。復元底径5.0cm。

高坏 (19~22) 19は高坏としたが、台付き鉢の台部分の可能性もある。摩滅して不明瞭だが、内外面ともハケメ調整している。全体に火を受けており、赤変している。裾部径14.7cm。

20は、外面は丁寧なハケメ調整。内面は摩滅して不明瞭であるがナデ調整である。坏部内面は



第26図 旧河遺出上土器実測図③ (1/3)



第27图 旧河造出土土器実測图④ (1/3)

摩滅して調整不明。

21は、脚端部付近は内外面ともに摩滅しているが、外面はハケメ調整、坏部との接合部はヨコナデ調整。内面はヨコナデ調整。復元裾部径16.0cm。

22は体部に段をもつ高坏であろう。脚裾部の可能性も捨てきれないが、整形が丁寧なので口縁部としておく。摩滅著しく、内外面とも調整は不明。胎土は精良だが多量の砂粒を混ぜる。復元口径18.7cm。

器台 (23) ほぼ完形であるが、摩滅著しく内外面とも調整不明である。口径14.4cm、裾部径14.4cm、器高17.8~18.2cm。

土師器

蓋 (37・38) 37はほぼ完形だが、全体に摩滅が著しく調整は不明だが、体部下半を手持ちヘラ削りしたことがかろうじてわかる。口径11.9cm、器高4.7cm。

38もほぼ完形である。全体に摩滅しており、体部から天井部にかけての外面を手持ちヘラ削りする以外は、調整不明。天井部外面には板状圧痕が残る。口径12.0cm、器高5.0cm。

坏 (32・33・39・40・44・45) 32の体部外面は摩滅して調整不明。内面も摩滅して不明瞭だが、ミガキ調整しているか。胎土に砂粒をほとんど含まない。復元口径14.0cm。

33の底部は丸みをもち、不安定である。摩滅して外面は調整不明、内面は不明瞭だがミガキ調整。胎土にほとんど砂粒を含まない。復元口径19.0cm、器高4.2cm。

39は摩滅著しく、調整不明。復元口径13.0cm。

40は41と形態がよく似ているが、口径に対して器高が低いので、坏とした。摩滅著しく、調整不明。復元口径10.0cm。

44は摩滅著しく、調整不明。底部はヘラ切り離しである。復元口径12.0cm、器高4.0cm、復元底径7.0cm。

45は、底部は完存しているが、高台壘付きを欠失する。底部はヘラ切り離し。復元口径13.6cm、復元高台径7.0cm、復元器高4.5cm。

椀 (46) 高台部分はヨコナデ、底部外面はナデ、体部内面はヨコナデだが、他の部分は摩滅して調整不明。復元高台径17.0cm。

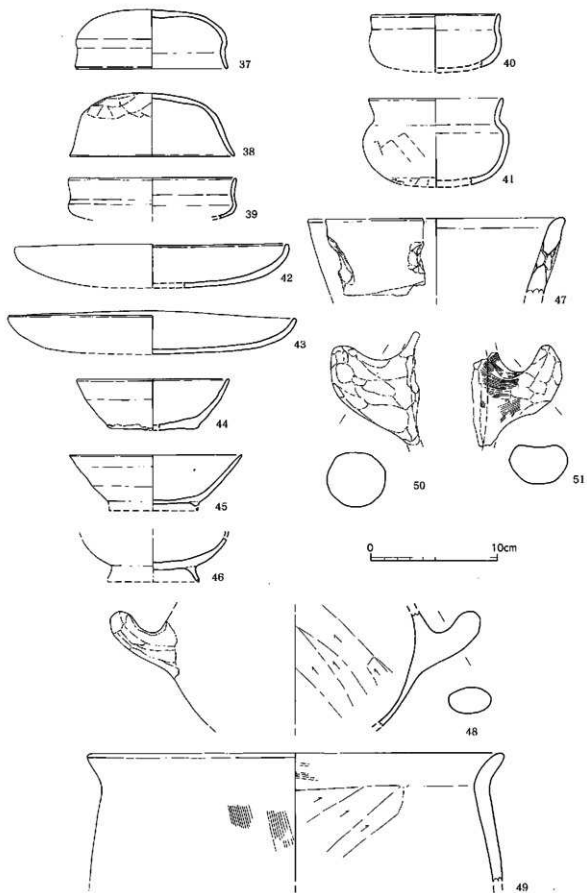
皿 (42・43) どちらも底部が丸みをもち、不安定である。42は口縁部内外面をヨコナデするほかは、摩滅により調整不明。復元口径21.5cm、器高3.5cm。

43は口縁部内面をヨコナデするほかは、摩滅著しく調整不明。底部外面に板状圧痕がわずかに残る。口径21.3~22.3cm、器高3.1~3.5cm。

高坏 (29~31・34) 29~31はいずれも脚裾部が屈曲して外方に開く。全体に摩滅しているが、内外面ともヘラ削りしている。復元裾部径は30が9.5cm、29が10.4cm。31の裾部径は9.4cmである。

34は体部に不明瞭な屈曲部をもち、高坏である。坏部はほぼ完存しているが、脚部は欠失している。摩滅著しく、体部外面をヨコナデする以外は調整不明。口径18.0cm。

鉢 (26) ほぼ完形である。内面と口縁部外面は、摩滅著しく調整不明。体部外面はハケメ調整。その後体部下半から底部を手持ちヘラ削り。削りの方向は一定しない。口径24.8~26.0cm、器高13.9cm。



第28圖 出河道出土土器実測圖⑤ (1/3)

壺 (24・25・41) 24は扁平な体部を持ち、丸底になるとおもわれる。口縁端部は窪ませ気味に仕上げる。口縁部内外面はハケメ後ヨコナデ、体部外面はヨコ方向後タテ方向にハケメ調整。下半はさらにその後粗いミガキ調整を施す。体部内面はハケメ調整。口縁部から体部にかけて黒斑あり。全体に丁寧なつくりで、焼成もよい。復元口径11.8cm、復元体部最大径15.0cm。

25は端部を内側につまみ出すように仕上げる。口縁部内外面ともにハケメ調整後、端部付近をヨコナデ調整。体部外面はハケメ後粗いミガキ調整。内面は工具による傷が残るが、調整はナデである。口縁部から底部にかけて黒斑あり。全体に丁寧なつくりで、焼成もよい。復元口径14.0cm、復元器高12.5cm。

41は底部を欠失する以外はほぼ完存。全体に摩滅して不明瞭だが、口縁部外面はヨコナデ、底部外面は手持ちヘラ削りしている。とくに口縁部付け根部分は強くヨコナデする。底部外面に黒斑あり。口径10.0~10.5cm、復元器高7.0cm。

壺 (27・28・35・36) 27は摩滅して不明瞭だが、口縁部外面はヨコナデ、内面は不明。体部外面はタタキ後ハケメ調整、体部内面は、ちょうど外面のタタキと対応する範囲は強いヘラ削り、それより上部は工具による擦過である。焼成はよい。復元口径19.7cm。

28も摩滅著しく、口縁部外面をヨコナデする以外は調整不明である。胎土は精良で、ほとんど砂粒を含まない。復元口径28.6cm。

35は摩滅して不明瞭だが、口縁部内外面ともにハケメ調整、体部外面はハケメ、内面はヘラ削り。復元口径17.7cm。

36も摩滅して調整が不明瞭であるが、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ、体部外面はハケメ、内面は強いヘラ削りである。全体につくりが雑で、粘土紐の継ぎ目が残る。復元口径19.0cm。

甗 (47~51) 47は小型品で、摩滅著しく調整不明。穿孔ないしは抉りを入れたような痕跡があり、破損後になにかに再利用されたとおもわれる。復元口径19.6cm。

48は体部が丸みを持つ。体部外面、把手部は摩滅著しく調整不明。体部内面はヘラ削り。

49は大型品で、口縁部外面は摩滅して調整不明、肩曲部はヨコナデ、内面はハケメ。体部外面はハケメ、内面はヘラ削りである。復元口径32.0cm。

50は摩滅が著しいが、下部にハケメが僅かに残る。

51は、把手の成型は手捏ねで、ナデで仕上げるが、体部のハケメ調整が接合部まで及んでいる。内面はヘラ削り。

須恵器

甗 (52) 肩部の小片である。二条の沈線と櫛目状工具による刺突文を巡らす。胎土はあまり砂粒を含まず、黒色粒がみとめられる。焼成は良好。

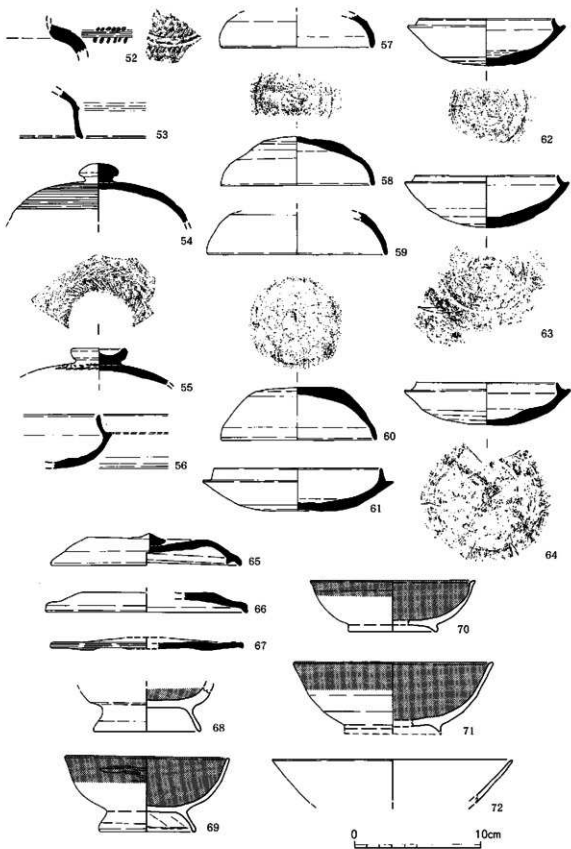
蓋 (53~55・57~60・65~67) 53は小片で径を復元できない。胎土は少量の細砂粒を含み、黒色粒がみとめられる。焼成は堅緻。外面後より上部に灰を被る。

54は天井部が高くなるとおもわれる。縮みはヨコナデ、天井部外面はカキ目を施し、内面は丁寧なナデ。天井部と体部の境付近を沈線状にくぼませる。体部は内外面ともにヨコナデ。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好。

55も天井が高くなるであろう。天井部外面に、櫛目状工具による刺突文を二重に巡らす。全体に厚く灰を被り、調整は不明。内面はヨコナデ後丁寧なナデ。胎土は細砂粒を含み、黒色粒がみと

められる。焼成は良好。

58は天井部外面にヘラ記号をもつ。天井部外面は回転ヘラ削り、体部外面と内面全体はヨコナ



第29圖 旧河追出土土器実測図⑥ (1/3)

ナ。復元口径12.0cm、器高3.8cm。

57は小片であるが、58と同じような形態になるとおもわれる。残存部分は内外面ともヨコナデ。胎土に多量の砂粗粒を含む。復元口径11.8cm。

59の外側は回転ヘラ削りと、ヨコナデ、内面はヨコナデ。復元口径14.0cm。

60はほぼ完形で、天井部外面にヘラ記号をもつ。回転ヘラ削りは天井部と体部の境付近の狭い範囲にしか行っており、天井部はヘラ切り難し後ほとんど調整をしていない。内面は不定方向のナデ、体部は内外面ともヨコナデ。口径12.2cm、器高4.2cm。

65もほぼ完形。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はヨコナデ。体部は内外面ともにヨコナデ。外面に灰を被る。口径15.0cm、器高2.5cm。

66の天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、体部は内外面ともにヨコナデ。復元口径15.8cm。

67は扁平で、焼き歪んでおり、天井部と体部を区別できない。口縁部は内外面ともヨコナデ、外面は回転ヘラ削り、内面は口縁近くまで不定方向のナデ。外面と内面の一部に灰を被る。復元口径15.0cm。

坏 (62~66) 56はごく小片のため径を復元できない。胎土は細砂粒と若干の粗砂粒を含み、黒色粒がみとめられる。

62~64はヘラ記号をもつ。62はほぼ完形で、底部の回転ヘラ削りの範囲が狭く、ヘラ切り痕が完全には消えていない。口径10.5cm、器高3.7cm。

63は、胎土に多量の粗砂粒を含む。復元口径11.2cm、器高4.1cm。

64は復元口径11.0cm、器高3.4cm。

61は復元口径13.1cm、3.4cm。

黒色土器

椀 (68~71) 68・69は薄く高い高台で、70・71は断面三角形の低い高台である。68の底部はヘラ切り難し後未調整で、板状圧痕が残る。内面を黒色に燻す。器面が荒れておりミガキ痕は不明だが、残存部分は滑らかである。復元高台径8.4cm。

69は内面と体部外面中位までを黒色に燻す。内面のミガキ痕は不明瞭だが器面は滑らかである。外面もまた摩滅して不明瞭だが、粗いミガキを行っている。口径12.7cm、器高5.8~6.0cm、高台径7.5cm。

70は内面と口縁部外面を燻す。摩滅著しく、大部分は調整不明である。分かる範囲では、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面下半は回転ヘラ削り。ミガキ痕はみとめられない。復元口径13.0cm、器高4.0cm、復元高台径7.0cm。

71も内面と体部外面中位までを燻す。摩滅著しく、口縁部内面の粗いミガキと体部外面下半の回転ヘラ削り以外は調整不明。復元口径15.8cm、復元器高5.7cm、復元高台径7.6cm。

磁器

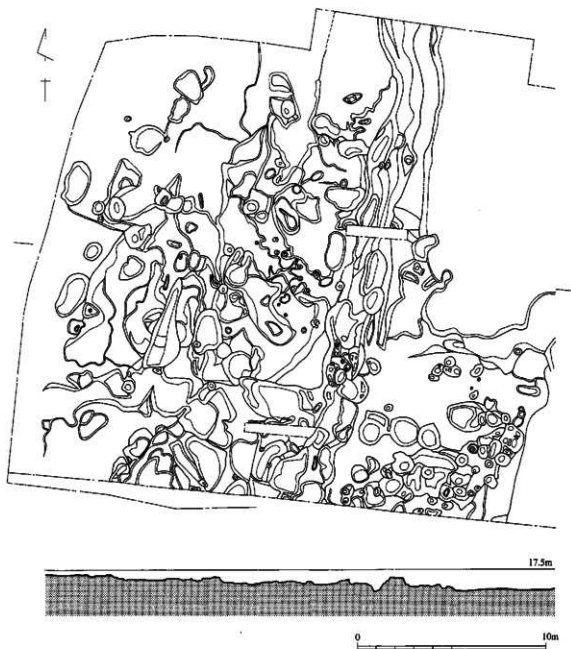
青磁 (72) 越州窯系の椀の小片である。残存部分は内外面とも全面に施釉している。釉は緑灰色を呈する。胎土は明灰色で、極小の黒色粒を含む。復元口径19.0cm。

これ他に土鏝、黒曜石剥片、砥石、その他石製品が出土している。

4. 包含層 (第21~23・30図)

調査区西側の台地上で、2号溝とほぼ並行して南北にのびる帯状の黒褐色土と、灰褐色砂質土を埋土とする多数の浅い掘り込みを検出した。これらは明確な遺構とはとらえにくく、包含層としてここで説明する。

検出当初は、性格は不明ながら黒褐色土を遺構と考えていたが、トレンチで土層を観察したところ、遺構ではないことが分かった。また、下層に黄褐色土の層があることも分かり、この層の上面



第30図 掘り込み部分実測図 (1/200)

で遺構の検出をすべきだと判断した。厚さ10～15cmほどの黒褐色土層を除去すると、黄褐色土(地山)、黒褐色土、灰褐色土のブロックが混じり合った層(黒褐色土下層)が現れた。黄褐色土に黒褐色土、灰褐色土を埋土とする遺構が切り込んでいるものと考え検出に努めたが、遺構とはなり得なかった。再度の土層観察の結果、人為的に埋められた層であることがわかり、この層を除去したところ、形も深さも一定しない掘り込みの連続であることが分かった。

掘り込みの目的は特定できないが、黄褐色粘質土(地山)の下層、礫層の上層に淡灰白色粘土、淡灰白色砂質粘土の層があり、どの掘り込みもこの層に達していることから、粘土採取が目的だったのだろうか。仮にそうであったとしても、この粘土は土器製作に向いている土質とは言い難く、また粘土層も厚さ0.15～0.2mと薄いが気になる。近隣では、津古土取遺跡(小部市)で、古墳時代の粘土採掘坑が報告されている。

一方で、調査区北壁から12mほど南に下がった地点から、調査区南壁までの間には、2号溝とは並行して堆積層がみられる。この堆積層は、細砂と粗砂、粘土の互層で、水が流れたことを示しているが、溝にはならなかった。2号溝に先行する自然流路であったか。この堆積層も先述の掘り込みも、ともに黒褐色土の下層になるが、掘削時には先後関係をつかみず、双方の遺物が混じる結果となってしまった。よって、あわせて黒褐色土下層として報告する。

灰褐色砂質土を埋土とする掘り込みは、後世の削平を受けて深さ4～15cmと非常に浅く、不定形で、その性格は不明である。はっきりとした遺構にはなり得なかったので、SXとして番号をふって遺物の取り上げを行った。遺物を掲載した箇所のみ、付図中に番号を入れている。

古いほうから黒褐色土下層、黒褐色土層、灰褐色砂質土層の順に、出土遺物をみていくことにする。

註1) 『津古土取遺跡』小部市文化財調査報告書第59集 小部市教育委員会 1990

黒褐色土下層出土遺物(図版11、第31～35図)

弥生土器

壺(1～13) 1は小型の無頸壺、2～4は複合口縁壺である。

1は全体に摩滅して調整が不明瞭で、外面はハケメかとおもわれる。内面はハケメ調整である。復元口径14.2cm、体部最大径17.0cm。

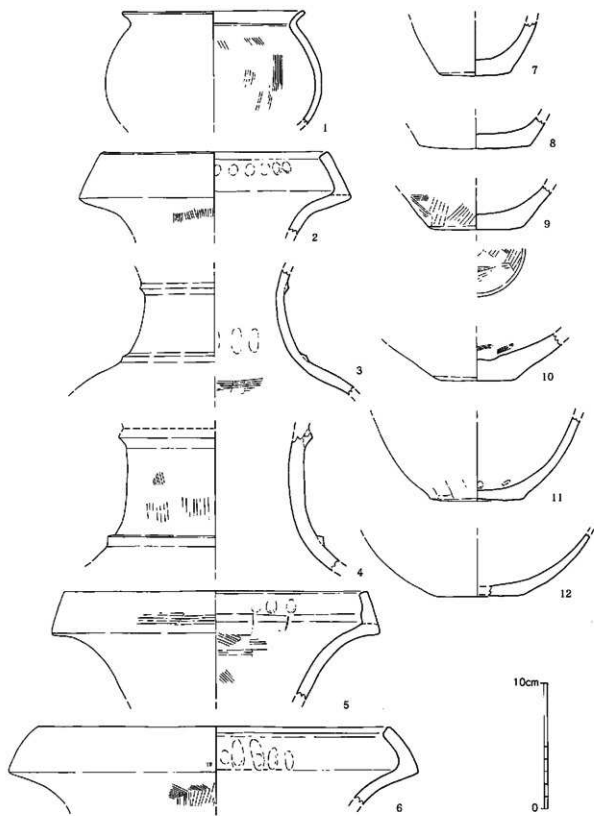
2は太く朝顔形にひらく頸部をもつとおもわれる。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面はハケメ調整、指頭痕が残る。内面は摩滅して調整不明。復元口径17.6cm。

3は上すばまりの頸部の上端と下端に三角凸帯をもつ。上端の凸帯のすぐ上に稜をもった袋状口縁がつくであろう。摩滅著しく、体部内面のハケメと頸部の指頭痕以外の調整は不明である。

4もまた頸部である。頸部が直立し、上端と下端に三角凸帯があることから、3と同様、稜をもった袋状口縁がつくであろう。摩滅著しく、外面にハケメが僅かに認められる以外は調整不明である。

5は、太くて直接外方に開く頸部をもつとおもわれる。摩滅して不明瞭だが、外面はハケメ調整、口縁部内面に指頭痕が残り、頸部内面はハケメ調整である。復元口径23.8cm。

6は稜をもつ袋状口縁である。摩滅して不明瞭だが、頸部外面はハケメ調整、内面はユビオサエ後ヨコナデ調整したことがわかる。復元口径28.2cm。



第31图 黑褐色土下層出土土器実測図① (1/3)

7は小型の壺の底部である。内外面とも摩滅して調整不明。底径5.2cm。

8はまだ平底の特徴を残している。摩滅著しく、調整不明。底径8.8cm。

9は粗く、雑なハケメ調整を行っているため、底部が不安定である。内面は摩滅しているがハケメがみとめられる。復元底径7.6cm。

10は体部の張りのわりに小さな底部を持ち、新しい様相を呈する。摩滅著しく外面の調整不明。内面はハケメかかろうじて残る。底径6.5cm。

11は摩滅著しく、外面に工具痕がわずかに残るもののハケメか削りかは不明である。底部内面に指頭痕と工具のアタリ痕が残る。底径7.2cm。

12も体部の張りに対して底部が小さい。摩滅して不明瞭だが、底部外面にハケメが残る。内面は工具による擦過か。復元底径6.4cm。

13はいわゆる凸レンズ状の底部である。体部外面はハケメ後、下半をタテ方向に工具でナテ調整し、さらに底部との境目付近をヨコナデする。内面はハケメ調整である。底部外面はハケメ後ナテか。内面はナテ調整である。体部外面に黒斑あり。底径8.3cm。

壺 (14~19) 14の口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はナテ、内面は不明。復元口径22.4cm。

15は口縁が外方に極端に開く。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面ハケメ調整、内面は摩滅して不明瞭だがハケメ調整している。復元口径25.8cm。

16・17は口縁部付け根を強めにヨコナデし、体部内面のハケメを互い違いに施す。

16の口縁部外面はヨコナデ、内面は摩滅して不明。体部は内外面ともハケメ調整。復元口径25.6cm。

17は、口縁部外面はヨコナデ、他の部分はハケメ調整。復元口径29.6cm。

18・19は口縁部付け根に三角凸帯をもつ大型の壺である。18は内外面ともハケメ調整。復元口径38.0cm。

19は内面に一部ハケメが残る以外は、摩滅により調整不明。復元口径46.8cm。

甔 (20) 焼成前に穿孔している。体部外面は工具による擦過、内面は丁寧なナテ調整である。復元底径7.2cm、復元口径1.6cm。

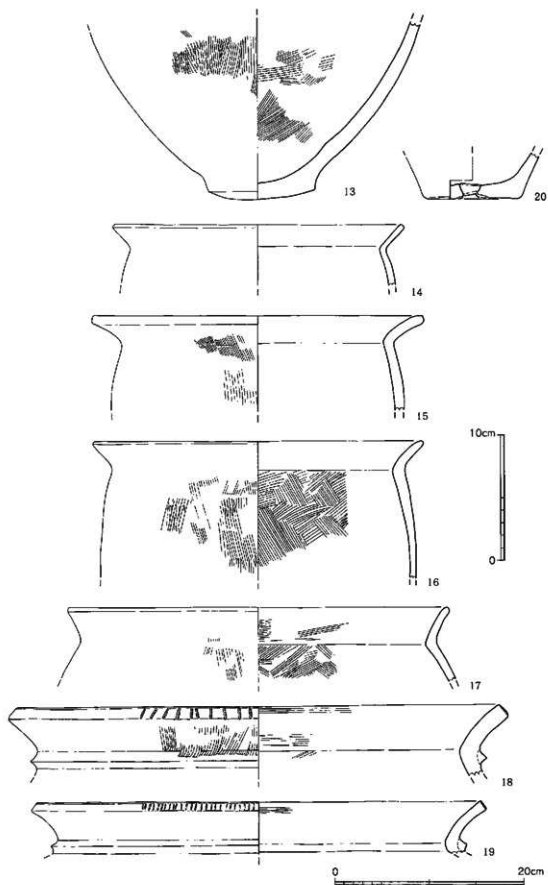
鉢 (21・22) ともに小型の鉢の口縁部小片である。

21の口縁部外面はヨコナデ、体部外面は粗いハケメ調整、内面はナテ調整で指頭痕が残る。復元口径15.6cm。

22はゆるく外反する口縁をもつ。甔の可能性もあるが、体部の丸みが強いので、ここでは鉢とした。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ後ヨコナデ、体部外面は粗いハケメ、内面はナテ調整。復元口径16.7cm。

高環 (23~25) 23は豊前系高環の口縁部小片であろう。摩滅著しく、体部外面にわずかにハケメがみとめられる以外は調整不明。

24は高環脚部片である。裾端部付近は摩滅して調整不明。外面はハケメ調整後、外側から穿孔。内面は下方をハケメ調整、上方は工具痕が残る。摩滅して削りか擦過かは不明。復元裾部径20.2cm。



第32圖 黒褐色土下層出土土器夾刻圖② (1/3, 18は1/4)

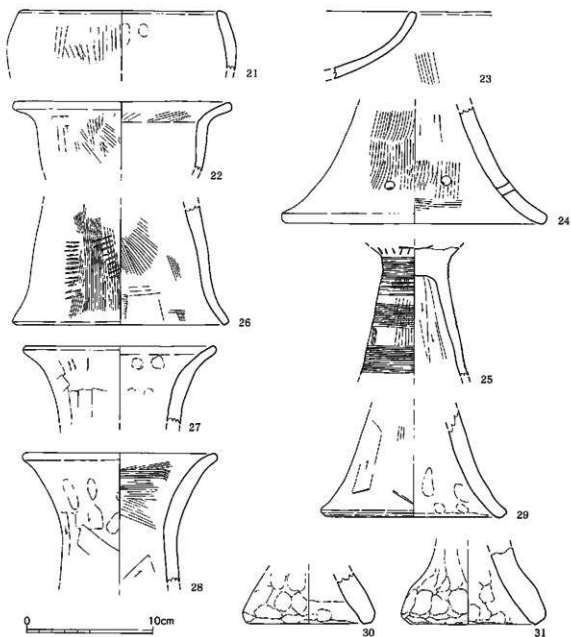
25は吉備系とおもわれる高坏脚部片である。外面はハケメ調整後、櫛目を三箇所に巡らす。基部は櫛目の始点と終点が合わず乱れている。内面は工具による擦過。坏部外面には刺突文を巡らす。内面は摩滅して調整不明。胎土には細砂粒、粗砂粒を含み、橙褐色に焼成する。

器台 (26~29) 26は小片だが、器台の脚部であろう。摩滅して不明瞭だが、外面はタタキ整形後ハケメ調整、内面はハケメ調整。復元径16.5cm。

27~29は形だけでなく胎土、色調もよく似る。

27の外面は工具による擦過後、口縁部のみ強いヨコナア。内面は工具による擦過で、指頭痕が残る。復元口径4.8cm。

28の外面は工具による擦過後、口縁部のみヨコナア。指頭痕残る。口縁部内面はハケメ調整、



第33図 黒褐色土下層出土器実測図③ (1/3)

中位は工具による擦過。復元口径14.7cm。

29は、外面は工具による擦過、一部ハケメがみとめられる。内面は摩滅により調整は不明だが、指頭痕が残る。復元口径13.7cm。

支脚 (30・31) ともに手捏ねで成形している。内面はナデ調整。30の復元器径は8.7cm、外面が被熱して赤変している。31は復元器径8.8cm。

土師器

椀 (32～34・45) 32は摩滅著しく調整不明。胎土はほとんど砂粒を含まない。復元口径9.7cm。

33の口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は手持ちヘラ削り、内面はハケメ調整。底部内面はヘラ削り。復元口径13.8cm。

34の口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部外面は手持ちヘラ削り。口縁下にヘラ偏多数。内面はヘラ削り。

45は摩滅して調整不明。底部はヘラ切り離しか。復元口径12.9cm、復元高台径7.7cm、器高6.4cm。

高坏 (35・36) 35は屈折痕が不明瞭な坏部がつく高坏である。坏部外面はハケメ後ヨコナデ調整、内面は不明瞭だが、ミガキ調整。脚部外面はハケメ後ヨコナデし、さらに一部に、ハケメを裝飾のように施す。規則性はなく歪んでおり、雑な印象である。脚部内面はヘラ削り。裾部は摩滅して調整不明。脚部の一部が被熱して赤変している。復元器径13.3cm、脚部高9.0cm。

36は摩滅著しく、脚部内外面をヘラ削りしたことがろうじてわかるのみである。胎土に砂粒をほとんど含まない。復元器径12.6cm、脚部高7.3cm。

壺 (37～40) 37は口縁が直線的に外方へのび、他は丸みを外反する。口縁部外面はハケメ調整後ヨコナデ、内面は摩滅著しく不明。体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り。復元口径19.4cm。

38は全体に摩滅して不明瞭だが、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ調整。体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り。復元口径28.0cm。

39は摩滅著しく、体部内面をヘラ削りする以外は調整不明。復元口径18.7cm。

40の口縁部内外面は摩滅して調整不明、体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り。復元口径22.3cm。

支脚 (41) 外面はタタキ、上面と内面はナデ調整。上面に焼成前に穿孔したであろう。

須恵器

蓋 (43～45) いずれも天井部外面にヘラ記号をもつ。

43は胎土に粗砂粒、細砂粒を多く含み、黒色粒がみとめられる。焼成は堅緻である。復元口径12.8cm、器高4.1cm。

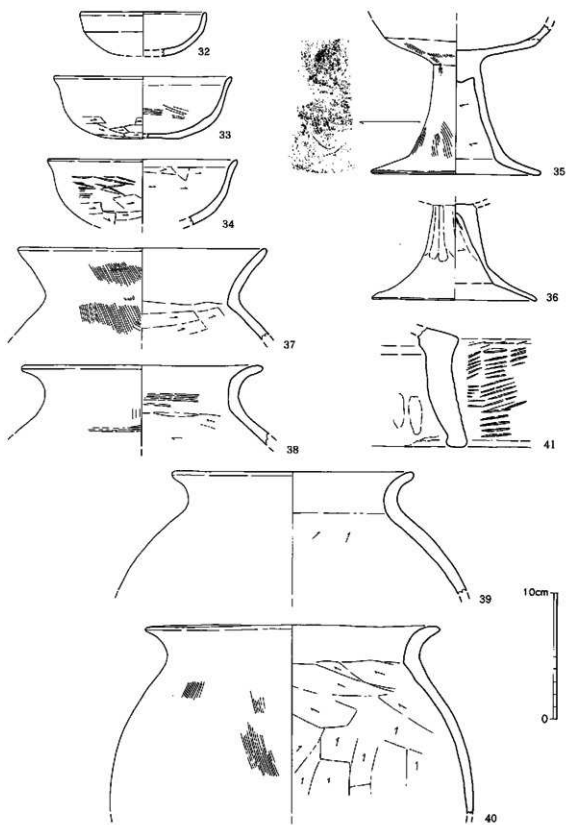
44は胎土に黒色粒がみとめられる。焼成は良好。

45は天井部外面を丁寧にヘラ削りし、内面をナデない。胎土には粗砂粒、細砂粒を含む。黄灰色に焼成する。復元口径12.2cm、器高3.9cm。

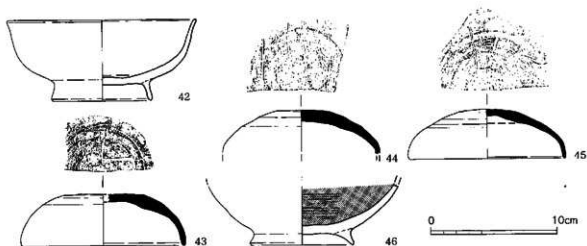
黒色土器

椀 (46) 調査区西端近くから出土。底部、高台は完存。内面のみ燻す。全体に摩滅して、外面の調整は不明、内面は粗いミガキ調整。高台径8.0cm。

この他にミニチュア土器、土製品、石庖丁、砥石、石製品、青磁が出土している。



第34图 黑褐色土下層出土土器実測図④ (1/3)



第35図 黒褐色土下層出土土器実測図⑥ (1/3)

黒褐色土層出土遺物 (図版11、第36・37図)

弥生土器

甕 (1・2) 小型の短頸甕である。1は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は粗いハケメ、内面はハケメ後ナデ。全体につくりが粗く、粘土粒の継ぎ目が見とめられる。復元口径10.8cm。

2もつくりが粗い。口縁部は内外面とも雑なヨコナデ。体部外面は粗い工具による擦過、内面はハケメ後ナデ。体部外面の残存部下端が赤変している。復元口径10.6cm。

甕 (3~7) 3は口縁端部を僅かに上につまみあげるように仕上げる。体部は張らない。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ後ヨコナデ、体部外面はハケメ、内面は工具による擦過か。外面全面に化粧土を施している。復元口径21.4cm。

4は口縁端部を上につまみあげるように仕上げる。体部は最大径が中位にくる。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は工具による擦過、内面はナデで指頭痕が残る。体部外面に被熱している。復元口径21.8cm。

5は小型の甕の底部である。外面は底部体部ともハケメ調整、内面は器壁が荒れていて調整不明。復元底径6.3cm。

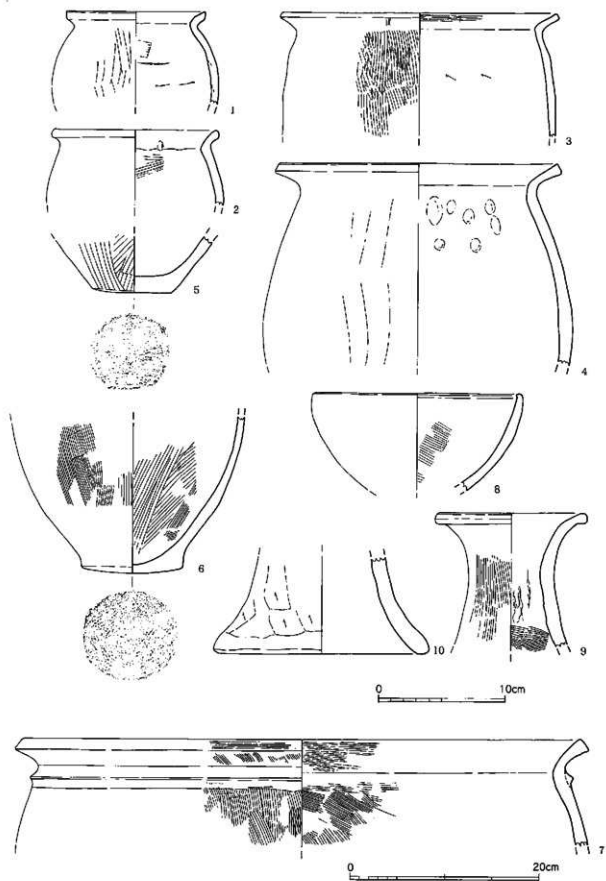
6は体部最大径が中位にくる小型の甕とおもわれる。体部外面はハケメ調整、下半はヨコナデないしナデ調整、内面はハケメ調整、底部外面はハケメ調整。外面に化粧土を施した可能性あり。底径8.0cm。

7は大型の甕の口縁部小片である。内外面ともハケメ調整、その後口縁部のみヨコナデ調整する。外面に化粧土を施している。復元口径57.4cm。

鉢 (8) 小片である。摩滅して調整は不明瞭である。外面は下方にハケメが僅かにみとめられる。内面は口縁部がヨコナデ、体部がハケメ調整。復元口径15.9cm。

器台 (9) 全体に摩滅している。口縁部の調整は不明。体部外面はハケメ、内面の中央部分は未調整、上方はヨコナデ、下方はハケメ調整する。復元口径11.4cm。

支脚 (10) やや大きい支脚である。体部外面はヘラ削りするが、裾端部、内面は摩滅して調整不明である。復元裾部径16.0cm。



第36圖 黑褐色土層出土土器尖刺圖① (1/3, 7は1/4)

土師器

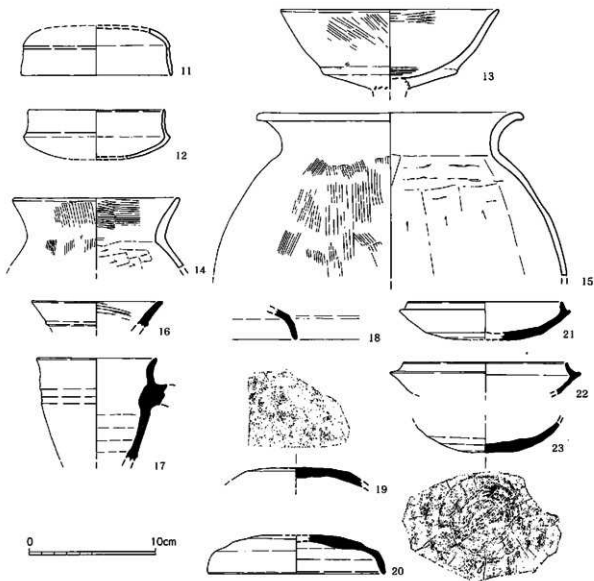
蓋 (11) 摩滅著しく、内面のヨコナア以外は調整不明。胎土に砂粒をほとんど含まない。復元口径11.8cm。

坏 (12) 摩滅著しく調整不明。胎土に極少量の砂粒を含む。復元口径10.7cm。

高坏 (13) 体部外面の屈折縁がはっきりしており、エンタシス気味の脚部がつくとおもわれる。外面はハケメ後ヨコナア、内面はハケメ後ミガキに近いナアを行っている。外面基部に刺突文を施す。復元口径19.0cm。

壺 (14) 小型の壺である。口縁部外面はハケメ後ヨコナア、内面はハケメ調整、体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り。復元口径13.0cm。

甕 (15) 口縁端部が外方に屈曲する。口縁部は内外面ともにヨコナア、外面はハケメ調整、内



第37図 黒褐色土層出土土器実測図② (1/3)

面はヘラ削り。内面に粘土紐の継ぎ目がみとめられる。体部外面に被熱し、赤変、黒変している。復元口径20.4cm。

須恵器

甕 (16) 口縁部の小片である。外面凸帯のすぐ下に、波状文がほんのわずかが確認できる。外面は灰を被って調整不明。内面はハケメのような工具痕がのこる。焼成は良好。復元口径10.2cm。

ジョッキ型土器 (17) 口縁部から体部にかけての小片である。把手の下方の接合部分がかるうじて残る。体部上位に凹線を2条巡らす。内外面ともヨコナアするが、内面は凹凸が激しく、粘土の継ぎ目が見える。胎土は細砂粒と若干の粗砂粒を含み、黒色粒がみとめられる。焼成は堅緻。外面の一部に灰を被る。復元口径9.4cm。

壺 (18~20) 18はやや鈍い感じの稜をもつ。胎土は微砂粒と若干の細砂粒を含むが精良で、焼成もよい。

19は天井部外面にヘラ記号をもつ。外面のヘラ削りは雑で、切り離し痕が完全には消えていない。

20は胎土に多量の細砂粒と粗砂粒を含む。外面に灰を被る。復元口径13.8cm、器高3.0cm。

坏 (21~23) 21は胎土中に黒色粒がみとめられる。復元口径12.0cm、器高3.0cm。

22の胎土は精良で少量の細砂粒、粗砂粒を混ぜる。焼成は堅緻である。外面に灰を被る。復元口径12.8cm。

23は底部外面にヘラ記号をもち、胎土中には黒色粒がみとめられる。

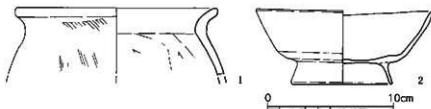
この他にミニチュア土器、土製品、石瓦丁、紡錘車、石錘、砥石、石製品、鉄器が出土している。

灰褐色土層出土土器 (図版11、第38図)

土師器

甕 (1) 口縁部の立ち上がりが短い小型の甕である。摩滅して不明瞭だが、口縁部外面はハケメ調整後ヨコナア、体部外面はハケメ、内面はヘラ削り。内面屈曲部が帯状に黒変している。復元口径15.9cm。

坏 (2) ほぼ完形の
高台付き坏である。
摩滅して不明瞭だが、
底部はヘラ切り離し
後ナデ。口径13.8cm、
器高5.4~5.9cm、復
元高台径7.8cm。



第38図 灰褐色砂質土層出土土器実測図 (1/3)

5. その他の遺物

ここでは、遺構・包含層等から出土した特殊な遺物、すなわち土製品（ミニチュア土器・土製勾玉・土鍾・土盤）、鉄製品、石製品（石包丁・石鍾・すり石もしくは作業台石・砥石・紡錘車）、そして一部の土器・陶磁器について述べる。また、図示していない粘土塊がいくつかあるので、それもここで触れる。

A. 土坑出土遺物（図版12、第41図）

土盤（図版12、第41図1） 5号土坑から出土した。土器片を利用した円盤である。弥生後期の腰部破片らしい。周縁に擦って磨滅したところがある。器表はやや風化しているが内外ともナテ調整である。多くの長石粒と少しの赤褐色粒子を含む。焼成はふつう。淡黄灰色をなす。径49～54.0mm、厚さ7.4mm、重さ21.9gをはかる。

B. 溝出土遺物（図版12・14・16・18、第40～44・46図）

土製勾玉（図版12、第40図1） 2号溝の南側から出土した完形の勾玉である。勾玉としては弧状の度合いがやや弱い腰がある。粘土を押しつぶして成形しており、尾部近くの背側には細かいヒビが見られ、器表はナテ調整であるが器面には目立つほどの起伏がある。また尾端部は丸くおさめずに8～10mmの範囲が斜めに平坦な面をとっている。成形後に何かに押しつけたかのようである。しかしながら全体として均整のとれた姿態に感受されるのは質感があるからだろう。頭頂部から10mmほどの所に径2～4.5mmの焼成前穿孔があり、図示した孔から腹部側へわずかにくぼんでいるのは、他面側にその痕跡が見られないものの紐ずれの痕かもしれない。砂粒はほとんど含まず胎土は良質。焼成は良好。頭頂部近くに径5～7mmの黒斑があり、それ以外は一部にやや黒ずむ所があるものの全体に茶褐色をなす。全長53.2mm、幅14.3mm、厚さ14.0mm、重さ12.8gをはかる。

土鍾（図版12、第40図2・5） 2は2号溝の南側から出土した管状土鍾で、紡錘形に近く、端部のごく一部を欠損するかほぼ完形である。器表はやや風化しているがナテ調整である。白色・赤褐色粒子を含むも胎土は良質。焼成は良好。茶褐色をなす。全長54.0mm、最大径14.3mm、孔径3.0mm、重さ9.1gをはかる。

5は2号溝北端部の北側拡張部の最上層から出土した。調査時に大きく破損して原面を残すのは僅かであるが、管状土鍾である。器表はナテ調整。胎土は精良。焼成は良好。茶灰色をなす。現存長26.7mm、最大径10.9mm、孔径2.6～2.8mm、重さ2.0gをはかる。

土盤（図版12、第41図2～5） いずれも2号溝の中央付近から出土した土器片利用の円盤である。弥生後期の腰部破片らしく、3と4は底部近く、5は下半部と思われる。土器片を打ち欠いて円形に近く形状を整えているが、周縁の一部に磨滅したところがあるのは、意識的に擦って磨滅したものと、使用するうちに磨滅したものとがあるようだ。

2は内外に粗い刷毛目があり、石英・長石粒を多く含む。焼成は良好。淡灰白色を呈する。径33.4～38.4mm、厚さ8.2mm、重さ11.5gをはかる。

3の外面は剥離があって調整がよくわからないが、内面はナテらしい。長石粒を多く含む。焼成はふつう。茶灰色を呈する。径44.4～49.3mm、厚さ8.2mm、重さ15.6gをはかる。

4は外面がナデ、内面は刷毛目を施す。多くの長石粒と少しの角閃石を含む。焼成は良好。茶灰褐色を呈する。径43.4~51.0mm、厚さ10.0mm、重さ20.3gをはかる。

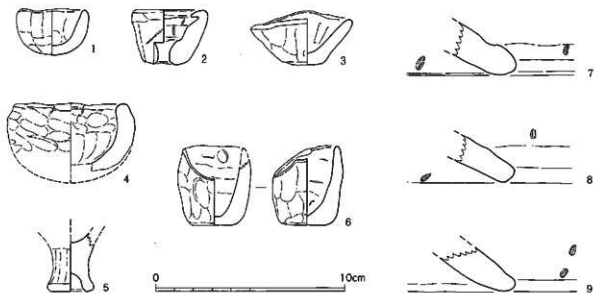
5は楕円形に近い形状で、内外ともナデ調整を施す。石英・長石粒を多く含む。焼成は良好。外面は茶褐色、内面は黄茶灰色を呈する。径45.0~60.0mm、厚さ7.0mm、重さ22.3gをはかる。

石包丁 (図版14、第42図1) やや淡い色調の小豆色をした輝緑凝灰岩製である。半月形的一端が折損した後そこに擦って、この形状でも使用したものとと思われる。2孔の位置は背部から同位置にないので、あるいは背部もかなり研ぎ直しがなされているのかもしれない。全体にかなり使い込んだことの伺える資料である。刃部には調査時の折損もある。孔は両方から穿つ。器表には擦過痕が著しい。刃部はわりに鋭利としてよいが、図の左側に見える刃部の方が他面より使用痕が目立つ。材そのものには所々に巣孔が見られる。全長112.0mm、幅39.5mm、厚さ6.5mmで、孔間は28.0mm、背から孔の中心までは11.0mmと8.0mmを測る。重さは48.7g。立岩産であろう。2号溝の南側部分から出土した。

石器 (図版16、第43図3) 灰青褐色をなす片岩であり、折損後の現状平面形は三角形に近い。周縁に細かい剥離があるわけでもなく、これを確実に石器として扱ってよいものかどうかかわからないが、一応図示しておく。あるいは石斧のような用途であろうか。現存全長138.6mm、幅74.3mm、厚さ15.0mm、重さ170.2gをはかる。2号溝の中央付近から出土した。

砥石 (図版18、第46図1) 灰黄白色を呈する片岩の中砥の破片である。平面形は三角形をなす中で使用面は2面しか残らないが、その面はよく磨れている。使用面には原材の節理に沿うと思われる弧状の僅かな段があり、あたかも鋳型面かのとき観がある。現存全長61.0mm、幅55.0mm、厚さ22.0mm、重さ56.1gをはかる。2号溝中央部から出土。

すり石 (図版16、第44図9) 凝灰岩質の石材で、平面形は三角形、縦断面形は楔形をなす。一表面に擦過痕があり使用したことは確かである。すり石としておくが作業台石のような用途かもしれない。白灰黄色を呈する。全長174.0mm、幅102.0mm、厚さ76.0mm、重さ1105gをはかる。2号溝南端部の最上層から出土。



第39図 出土製品実測図 (1/2)

C. 旧河道出土遺物 (図版12・16・18・19、第40・43・44・46圖)

土鍾 (図版12、第40図3・4) 3は紡錘形をなす完形の土鍾である。器表は少し風化しているが、ミガキに近いナデ調整を行い、わずかに面を取っている。孔は大きくてやや楕円形をなす。砂粒を含むも胎土は良質。焼成は良好。灰橙色をなす。全長45.1mm、最大径18.4mm、孔径6.7~7.8mm、重さ11.3gをはかる。北西端部付近から出土した。

4も北西端部に近い所から出土した。端部のごく一部を欠損するがほぼ完形の管状土鍾である。両端部の径は異なっており、一方の端部から他端部へと直線的に移行している。器表はミガキのちナデ調整を行っているらしい。孔は楕円形気味である。胎土は精良。焼成は良好。茶褐色をなす。全長37.8mm、最大径10.2mm、孔径3.3~3.8mm、重さ3.7gをはかる。

粘土塊 (図版19-10) 2×4cmに厚さ2cmほどの不整形の粘土の塊である。焼成を受けている。胎土は良質で、砂粒も全く含まずサのような混和材は見えない。茶褐色を呈する。上層からの出土。

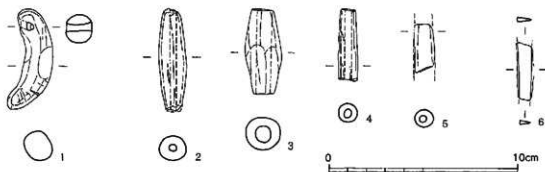
黒曜石製品 (図版16、第43図1) 漆黒色をなす黒曜石剥片を素材とする石器で、本来の形状が定かでないが、下方の折損部がもう少し伸びていって鈍になるものかもしれない。剥片の短辺に剥離を加えて脚状の突出部を作り出しているが、そこが折損している。現存全長15.5mm、幅20.3mm、厚さ5.0mm、重さ1.7gをはかる。北西端部下層から出土した。

軽石製品 (図版16、第43図5) 赤茶色をなす軽石であり、二次熱を受けているらしい。折損して本来の形状がわからないが、残存部の中央には擦ってきたかと思われる窪みがある。用途は明確でない。現存全長44.0mm、幅53.0mm、厚さ20.0mm、重さ18.7gをはかる。

石製品 (図版16、第43図6・7) ともに平面形が長楕円形で、灰白色の玄武岩質石材の小石である。表面には磨れたところがあつて、何かの用途に使用したかと思われるが定かではない。あるいは投弾のようなものであつたかもしれない。石器とするには躊躇するが一応図示しておく。6は全長44.0mm、幅26.3mm、厚さ19.0mm、重さ27.3g、7は全長39.0mm、幅20.0mm、厚さ19.8mm、重さ19.4gをはかる。下層からの出土。

砥石 (図版18、第46図2) 粘板岩に近い砂岩と思われる石材で、黄灰色を呈する仕上げ砥石の破片である。かなり使い込んでおり、最も薄い所は厚さ2mmほどしかない。現存全長55.3mm、幅37.0mm、厚さ11mm、重さ20.2gをはかる。上層出土。

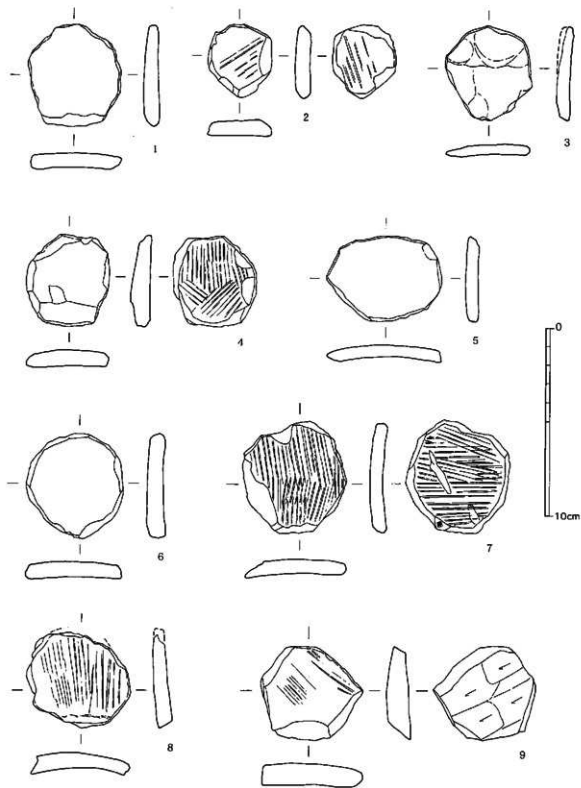
すり石 (図版16、第44図10・11) 10は玄武岩質の石材で、平面形は台形状をなす。一面はとてもよく磨れた平坦面で、この面は二次熱を受けて赤変している。他面は起伏がありながらも斜面がこれもよく磨れている。全体としては水分の多い所に埋もれていたせいか灰茶色を呈する。全長



第40圖 出土土製品・鉄製品実測圖 (1/2)

127.0mm、幅131.0mm、厚さ71.0mm、重さ1570gをはかる。上層から出土。

11は安山岩質の石材で、折損して全形はわからない。残存部の横断面形は三角形をなす。そのうちの二面には多くの擦過痕があり、数回にわたって擦過した形跡がある。また二次熱を受け



第41圖 出土土盤実測図 (1/2)

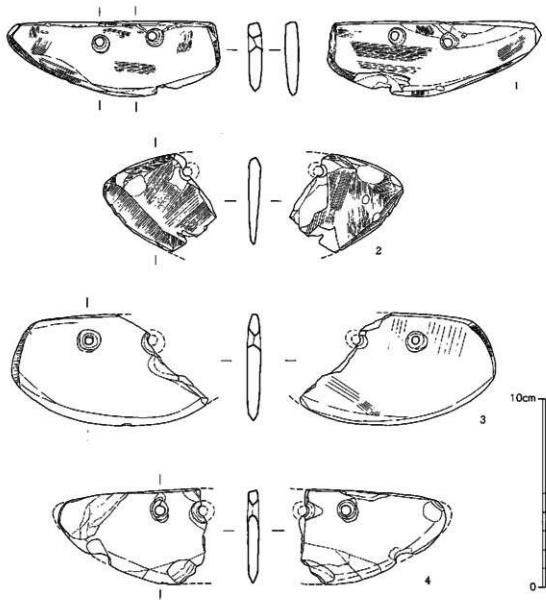
て赤変した所がある。全体としては茶褐色を呈する。現存全長150.0mm、幅116.0mm、厚さ82.0mm、重さ1635gをはかる。上層から出土。

D. 包含層出土遺物

a. 黒褐色土下層出土遺物 (図版12・14~18、第39・41~43・45・46図)

ミニチュア土器 (図版12、第39図1) 南側から出土した。約2/5が残存する楕形の破片で、手捏ねであり、内外ともナデ調整である。良質な胎土に赤褐色粒子を含み、焼成は良好。茶褐色を呈する。復元で口径3.8cm、器高2.4cmを測る。

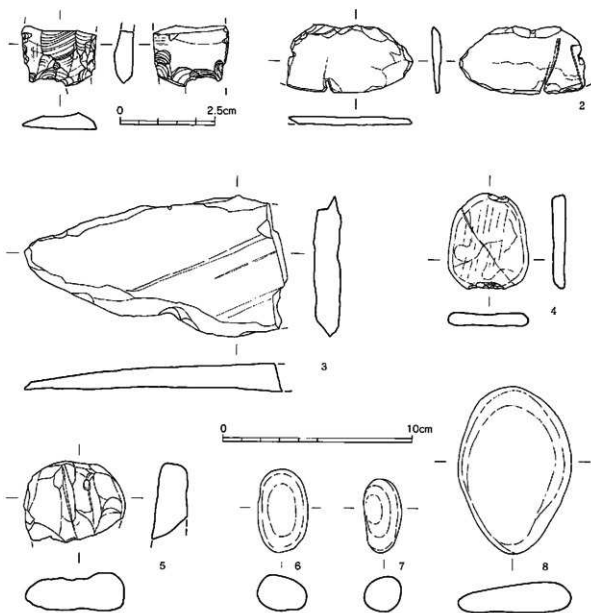
土盤 (図版12、第41図6) 土器片利用の円盤で、弥生後期の甕の胴部破片らしい。周縁に擦って磨滅したところがある。表裏とも磨滅して調整不明。大きめの石英・長石粒を多く含む。焼成はふつう。茶褐色を呈する。径50.7~56.2mm、厚さ9.4mm、重さ29gをはかる。



第42図 出土石包丁実測図 (1/2)

石包丁 (図版14・15、第42図2・4) 2は小豆色をした輝緑凝灰岩製で、約1/3ほどの破片である。2号溝出上品よりは色が濃い。現状では背部も湾曲しており杏仁形をなす形状と受け取れる。磨表には表裏ともに条痕といってよいほどの擦過痕が著しく、かなり使い込んだものとしてよい。半分しか残らない一孔は両方から穿っている。刃部はあまり鋭利とは言えずややなまくな感じである。材そのものに白い斑点をなす所がある。現状で全長61.0mm、幅51.5mm、厚さ6.5mm、重さは20.4gをはかる。立岩産であろう。中央よりやや南側から出土した。

4は灰褐色をなす石材で砂質の片岩である。約半分を欠失するが、半月形をなすものであろう。残存する部分も調査時の打突によって亀裂がある。孔は両方から穿つ。刃部はわりに鋭利としてよい。片岩という剥離しやすい材質であり、適切な石材とは言い難いものである。現存の全長72.3mm、幅50.0mm、厚さ5.7mmで、孔間は23.0mm、背から孔の中心までは11mmと12mmを測る。重さは32.4g。中央付近から出土した。



第43図 出土石製品実測図① (1/1、1/2)

砥石（図版18、第46図6） 砂岩の中砥で、平面形はばち状の長方形もしくは長六角形といった形状である。表裏・長側面ともによく使い込んでおり、短側面も使用面に加えて折損後に少し擦れた面とがある。図示した左面は中央の45～95mmの楕円形の範囲がよくすり減っていて、その左上方には12～25mmの範囲に細かい敲打痕が見られる。灰白黄色を呈する。全長133.0mm、幅79.0mm、厚さ23.2mm、重さ328.6gをはかる。最南端部から出土した。

すり石（図版16・17、第43・45図8・12・13） 8は平面形が長楕円形で、灰黄褐色を呈する玄武岩質石材である。表面には磨れたところがあるので、すり石としておく。全長88.0mm、幅59.3mm、厚さ15.6mm、重さ105.0gをはかる。南端部付近からの出土。

12は玄武岩質の石材で、平面形は六角形状をなす。一面は平坦面、他面は二面の斜面をなすが、



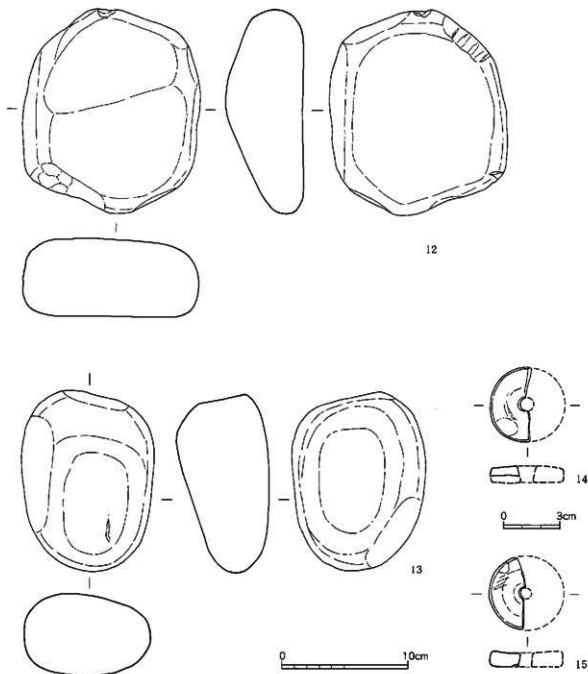
第44図 出土石製品実測図② (1/3)

両面ともよく磨れている。灰褐色を呈する。台石とすべきかもしれない。全長162.0mm、幅138.0mm、厚さ61.0mm、重さ1850gをはかる。南端部付近から出土。

13も玄武岩質の石材である。表裏ともよく磨れており、一部には擦った痕跡がある。また頭頂部は磨れて平坦面ができている。白灰色を呈する。全長143.0mm、幅105.0mm、厚さ72.0mm、重さ1500gをはかる。南側から出土。

b. 黒褐色土層出土遺物 (図版12・13・15・16・18、第39～43・45・46図)

ミニチュア土器 (図版12、第39図2～5) 2は調査時に口縁周辺の約1/2をその直下まで欠損したが本来は完形品である。椀というよりは底部を形成する鉢形をなし、底部には焼成前の穿孔があ



第45図 出土石製品実測図③ (1/2、1/3)

つて甔を模したのかと思われる。手捏ねであるが全体に分厚いつくりであり、底部はとくに厚い。口唇内面が内側にオーバーハングする形状をなすが、これは正立状態で成形したあとに逆さまにして口縁を下におき、底部側から力を加えた結果と考えられる。おそらくは底部穿孔をする際の所作としてなされたものであろう。外面は一部に面を取るようなナアが見られ、内面は成形時のままの状態である。石英・長石粒と赤褐色粒子を含み、胎土はやや粗い。焼成は良好。外面は黄灰色、内面は灰黒色を呈する。口径4.0cm、底径2.3cm、器高2.8cm、孔径5.2~6.3cmを測る。南側から出土。

3は鉢形のミニチュア土器として図示するが、「口縁」として残存する部分がこくわずかであり、それが擬口縁の可能性もないではないので小型の甔の底部付近ということもありうることをお断りしておきたい。全体としては2/3ほどが残存する。成形は手捏ねとしてよいだろう。内外ともに基本的にナア調整であるが、外面は一部に面を取るようなナアと押圧が、また内面には木片工具の小口痕らしき条線が見られる。赤褐色粒子を含むが、胎土は良質。焼成は良好。外面は灰黄色~黒褐色、内面は黒灰色を呈する。復元口径5.4cm、底径2.4cm、器高2.8cmを測る。南側から出土。

4は約1/3が残存する碗形の破片で、ボウル状の形状をなす。手捏ねであり、外面は強いナア及び押さえ、内面はミガキに近いナアの調整を施す。器壁は厚い。石英・長石粒と僅かの赤褐色粒子を含み、胎土は粗い。焼成は良好。茶褐色を呈する。復元で口径6.0cm、器高4.2cmを測る。北側から出土。

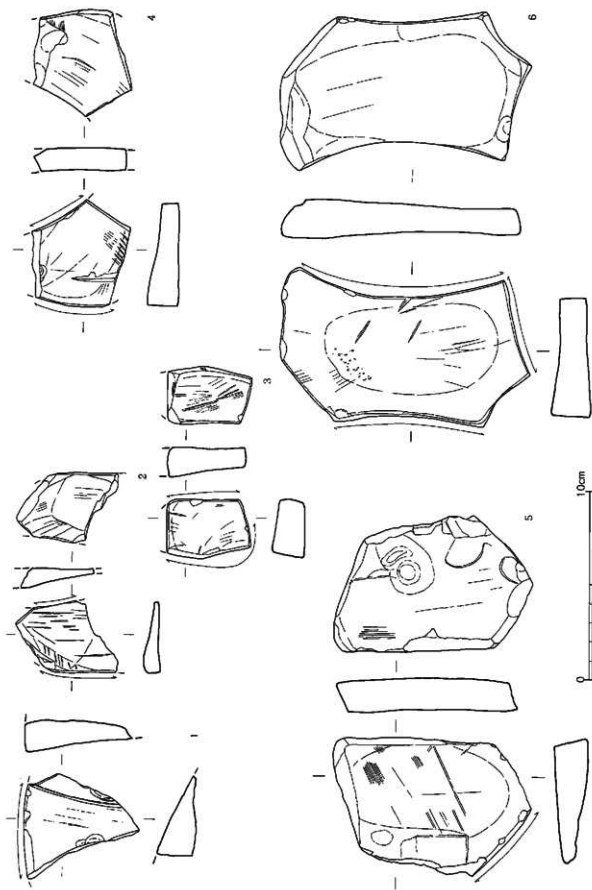
5は器台状をなすもので、受部は欠損し、脚台部は約3/5を欠失している。手捏ねであり、内外ともにナア調整を施す。赤褐色粒子を含むが胎土は良質。焼成は良好。橙黄色を呈する。脚台の裾径は復元で2.4cm、現存器高3.0cmを測る。南側から出土。

器台形土器 (図版13、第39図7~9) 器台形土器としておくが蓋状の器形になる可能性もある。3点ともに小破片で、胎土・焼成等から同一個体かと思われるが接合はしない。つくりは粗く、内外ともナアにて調整する。胎土の中にスサ・粉を含み、器表にもその圧痕が見えている。最もよく見えている7の粉痕は長さ7.1mm、幅3.6mmを測る。胎土そのものも粗く、焼成はふつう。内外とも橙灰色を呈する。器台にしろ蓋にしろ、用途は糠貯蔵等の器に関連した特殊なものが想定されよう。北側から出土。

土盤 (図版12、第41図7~9) いずれも北半部から出土した土器片利用の内盤である。7は弥生後期の甔胴部下半の破片と思われる。周縁に擦って磨滅したところがある。内外ともに粗い刷毛目を施している。石英・長石粒を多く含み、赤褐色粒子も含んでいる。焼成は良好。茶灰色を呈する。径52.7~59.0mm、厚さ8.0mm、重さ26.0gをはかる。

8も弥生後期の甔の破片で、底部のすぐ近くらしく大きく湾曲している。周縁に擦って磨滅したところがある。外面は刷毛目を施し、内面はナアである。内面にはコゲらしき物が付着している。石英粒を多く含み、焼成はふつう。外面は黄褐色、内面は黒茶色を呈する。径46.0~55.0mm、厚さ8.5mm、重さ22.7gをはかる。

9は土師器の甔の胴部片で、外面は少し煤けている。周縁に擦って磨滅したところがある。外面は刷毛目のものにナア、内面はケズリを施す。多くの長石粒を含み、少量の赤褐色粒子も含んでいる。焼成は良好。外面は橙黄色、内面は灰黄色を呈する。径50.0~53.0mm、厚さ12.0mm、重さ30.7gをはかる。



第46圖 卍土底石実測図 (1/2)

粘土塊 (図版19-1~9) 9点があり、いずれも焼成を受けている。1は3×5cmに厚さ2cmほどの丸みを持った塊で、表面にイネ科植物の茎の圧痕が多数見られる。これだけで完結した個体であり、これのみが他と異なっている。茶灰橙色を呈する。2~5はササなどの混和材は見えず、茶褐色を呈する。胎は硬質としてよい。6~9は表面に面を持つところがあり、ともに胎土の中にササを含み、赤茶褐色を呈することから、カマドもしくは塗り壁のような建造物の外面の破片かと思われる。他よりは胎土がやや粗い感じがする。1~5は北側、6~9は南側からの出土。

石包丁 (図版15、第42図3) 薄い灰色をなす石材で凝灰岩であろう。約1/3を欠失し、残存する端部は擦り切られた状態である。これを二孔の中心から折り返して欠失部を復元すれば長方形に近い形状となるが、本来は半月形をなしていたものが破損したあと、残存端部を調整して現状のような形状としたものであろう。一孔を含む欠失部の破断面も破損後に擦った形跡がある。全体にかなり使い込んでいる。孔は両方から穿つ。刃部はわりに鋭利としてよい。材そのものの中に黒曜石のようなガラス質の粒子が入り込んでいて火山岩由来の石材であることがわかる。現存の全長104.2mm、幅59.3mm、厚さ8.8mmで、孔間は32.0mm、背から孔の中心までは14.0mmを測る。重さは66.2g。南側部分から出土した。

石製紡錘車 (図版16、第45図14・15) ともに滑石製の紡錘車破片であり、灰褐色を呈する。北側部分から出土した。14は平面的には約半分が残るか剥離もしており遺存状態はあまりよくない。脆くて、器表の一部にも剥離した部分があるが、破断面は層状に剥離しかかっている。径39.3mm、厚さは現状で5.7mm、復元すると8mm、孔径5.4mmを測り、重さは現状で7.3g。

15は1/2弱が残る。器表には細かい条線が多数見られる。復元で径39mm、厚さ8mm、孔径6mmほどとなろう。重さは現状で8.8g。

石錘 (図版16、第43図4) 平面が五角形状をなす扁平な片岩の自然石を打ち欠いて錘としたものである。両端の打ち欠き部周辺に紐ずれの痕跡は見えない。灰青褐色をなす。全長50.3mm、最大幅42.3mm、厚さ7.1mm、重さ23.0gをはかる。北側から出土した。

砥石 (図版18、第46図3~5) 3は粘板岩かと思われる灰褐色をした石材で仕上げ砥石になる。平面形は長形状である。表裏・長側面ともによく使い込んでおり、短側面も折損後に擦って使った痕跡がある。現存全長43.5mm、幅31.3mm、厚さ17.6mm、重さ33.0gをはかる。

4は粘板岩に近い砂岩と思われる石材で、仕上げ砥石になる。灰白黄色を呈する。平面形は折損もあって偏五角形をなす。表裏ともによく使い込んでおり、側面も使用がある。現存全長51.7mm、幅56.0mm、厚さ10.9mm、重さ56.4gをはかる。

5は泥岩かと思われる軟らかい材質の石材で、仕上げ砥石になる。器表は茶褐色を呈するが、材本体は灰黄色をなす。平面形は偏五角形で、図の左面はとともによく使用しているが、右面は多くが材の原面を残して一部のみ使用している。全長107.0mm、幅71.0mm、厚さ19.0mm、重さ166.1gをはかる。3は北側、4・5は南側から出土した。

鉄製品 (図版12、第40図6) 鉄器の破片であるが、錆が強いこともあって本来の形状がよくわからない。図示した上方の断面形は片刃を有した楔形になることは確かのものであるが、下方側の断面形が両刃の突レンズ状に見えるので判断に苦しむところである。図では下方側も錆を考慮して片刃のように示し、刀子か鎌の可能性のあるものとしておくが明確ではない。現存長30mmを測る。北側から出土。

c. 灰褐色砂質土層出土遺物 (図版12・16、第39・43図)

ミニチュア土器 (図版12、第39図6) 6は2号暗架の南側から出土した。本来は別の遺構に属していたものが暗架掘削時に混入したのだろう。完形の円筒状ミニチュア土器で、口縁の2/3を斜めに切り取って窓をあけた形状とする。器高が高いが、茶の湯における土風炉に似た鑑がある。内壁面に粘土の接ぎ目らしきくぼみがあるので、成形は手捏ねではなく輪轆みと思われる。内外ともに基本的にはナア調整であるが、外面はミガキに近いところがある。石英・長石粒を含むが、胎上は良質としてよい。焼成は良好。外底面は黒色、それ以外は黄褐色をなす。口径3.6cm、底径2.8cm、器高4.2cmで、「窓」の最も低い所までは2.5cmを測る。

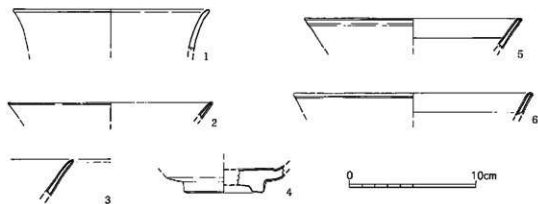
石器 (図版16、第43図2) 灰青黒色をなす薄い片岩を素材とするもので、平面形は杏仁形に近い。これを確実に石器として扱ってよいものかどうか躊躇するところであるが、側縁の3カ所に挟ろうとしたか穿孔しようとした所があって、それは人為的なものとみなされる。下辺にある挟りの部分から紐ずれのような痕跡も伺えるので、鎌のような用途に供したものであろうか。現存全長65.3mm、幅35.4mm、厚さ5.0mm、重さ16.5gをはかる。SX20から出土した。

E. 陶磁器等 (図版18、第47図1~6)

須恵器 (図版18、第47図1) 2号暗架からの出土であるが、本来は旧河道に存したものであろう。椀の口縁部破片と思われ、口径16cmに復元して図示しているが、小破片であるため確実性に欠けるところがある。口縁には少し歪みがある。内外とも回転ナア調整である。良質な胎土で、焼成は良好。灰色を呈する。

青磁 (図版18、第47図2~4) 2は碗の口縁部破片で、小破片であるため確実性に欠けるところがあるが復元口径は16.2cm。釉は薄く黄灰色に発色している。口唇部は口売げとなっている。同安窯系か。包含層上層出土。3も碗の口縁部破片。釉は薄く灰緑黄色に発色している。龍泉窯系か。排土中採集。4は碗の底部片で、高台内面と髹付部分は露胎のままである。釉は薄く緑灰色に発色する。約1/4の破片で復元高台径5.8cm。龍泉窯系。排土中採集。

白磁 (図版18、第47図5・6) ともに輸入陶磁の碗の口縁部破片で排土中等からの採集品である。5は端反り風の口縁端部で内面に沈線を持つ。釉は薄く白濁色に発色している。胎は白い。復元口径17.2cm。6は小破片であるため確実性に欠けるところがあるが復元口径は19cm。釉は薄く黄灰白色に発色している。胎もややくすんだ白である。



第47図 出土陶磁器実測図 (1/3)

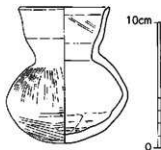
6. 松門寺遺跡西隣接地採集土器 (図版9、第48図)

本遺跡の西に広がる台地上では古くから土器の散布が確認されており、常盤遺跡ととらえられている。本遺跡西隣接地は現状で一段高くなっており、台地が削平されずに残っている可能性が非常に高く、今後の調査の進展が期待される場所である。

さて、今回の調査中、西隣接地の地主さんが、畑を耕作中に出土したという土器を持参された。「宝の持ち腐れだから」とのことなので、お預かりしてここに報告し、今後は当教育委員会で保管することにした。

土師器

壺 口縁部の一部を欠失する小梨丸底壺である。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ後ヨコナデ調整。体部外面上半はハケメ後ナデ、下半は粗く、強いハケメ調整。内面はヘラ削りである。底部外面に黒斑あり。また、口縁部から体部にかけて、被熱により赤変する。復元口径7.0cm、器高10.8cm、体部最大径9.6cm。



第48図 松門寺遺跡西隣接地採集土器実測図 (1/3)

第4章 おわりに

本遺跡は大部分を旧河道が占め、検出された遺構は多くないが、時期をおってその変遷を概観し、注意される点をあげてまとめたい。

旧河道の上限を直接指し示す遺物はないが、遅くとも弥生時代後期にはこの場所に流れを形成していた。旧河道西側の堤防上には弥生時代後期中ごろの鹿棄土坑（5号土坑）があり、当該期の集落が存在しているものとおもわれる。この時旧河道は東寄りに流路をとっており、5号土坑より西に存在した当該期の遺構が、後世旧河道に削られた可能性はある。また、旧河道東岸近くで、当該期の土器があまり摩滅せずに出土していることから、東側堤防上にも集落の存在は予想される。

古墳時代前期の明確な遺構はないが、旧河道から、須恵器出現以前とおもわれる小型丸底甕や鉢、さらにジョッキ形土器、装飾をもった蓋など初期須恵器が出土している。筑後川北岸の朝倉古窯跡群（夜須町）や池の上墳墓群、古寺墳墓群（甘木市）との関連がうかがわれ、興味深い。

また、現在浮羽バイパス建設に先立ち調査中の大的遺跡は、本遺跡西側台地の西端部にあたり、当該期の住居跡が検出されている。集落がこの台地上に展開していることはほぼ間違いない。

古墳時代中期の遺構は、粘土採取のための掘り込みと、2号溝である。土層の観察から、掘り込み埋め立て後、あまり時間をおかず2号溝が掘削されたものとおもわれる。2号溝はほぼ地形に沿っており、調査区内で旧河道と交わることはない。利水のためではなく、区画の意味があったのだろう。となれば、当該期の集落は西側台地上に広がるのか。

その後、旧河道は徐々に流れを西へ移動させる。奈良時代ごろには調査区ほぼ中央を流れ、その後さらに西へ西へと流路を変え、10世紀ごろ埋没したものとおもわれる。旧河道埋没後、3号土坑が掘削される。このころの様相は、本遺跡の状況からは残念ながらはっきりしない。しかし、次の時代には古文書上に大荘園の一角として現れる地域である。すでに新田開発は活発に行われていたであろう。

鎌倉時代になると、竹野庄東郷の一部として松門寺の名が史料に登場する。やはり、集落の中心は東西の自然堤防上になるであろう。1号土坑以外に顕著な遺構はない。

以上、気づく点をあげながら本遺跡の内容を概観した。残念ながら、人々の生活を直接知りうる遺構には恵まれなかったが、東西の自然堤防上に眠っている遺跡の重要性を知ることができたのではないかと考えている。

耳納山麓に膨大な数の群集墳を築いた人々の生活の様子は、未だによくわかっていない。また、田主丸町は条里制地割がよく残る貴重な地域である。既に、条里や古文書の研究で様々な成果が上がついているが、まだまだ不明な点が多い。今後の発掘調査の進展によって、古代、中世の人々の活動が一層明らかになることを期待している。

圖 版



1 調査区西半 (空中写真 上が北)



2 調査区東半 (空中写真 上が北)



1 1号土坑
(南西から)



2 2号土坑
(南西から)



3 4号土坑 (北から)



1 5号土坑
土器出土状況南半
(北から)



2 5号土坑
土器出土状況北半
(北から)



1 5号土坑完掘状況
(空中写真 上が北)



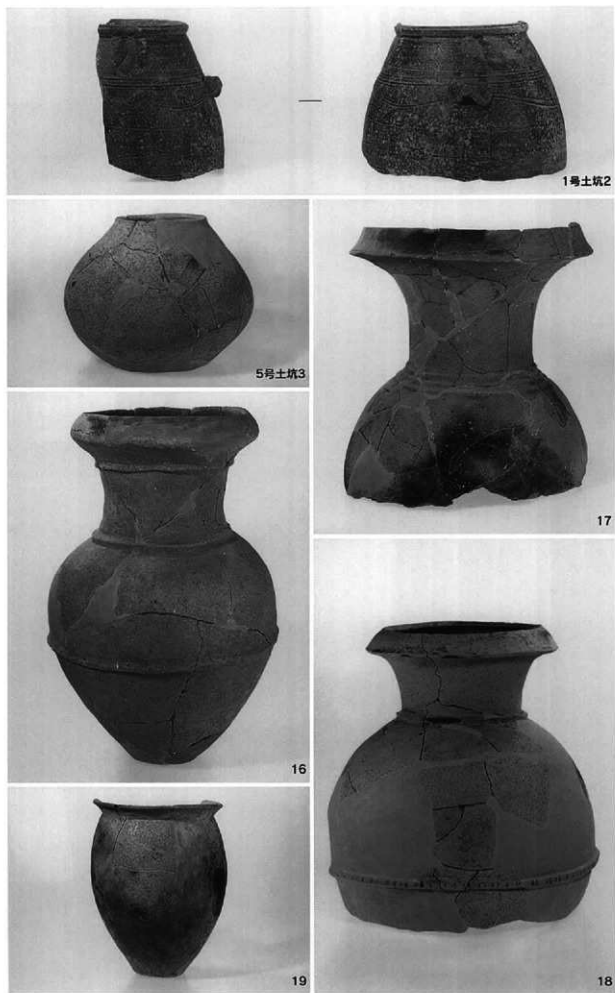
2 調査区北壁土層
2号溝付近



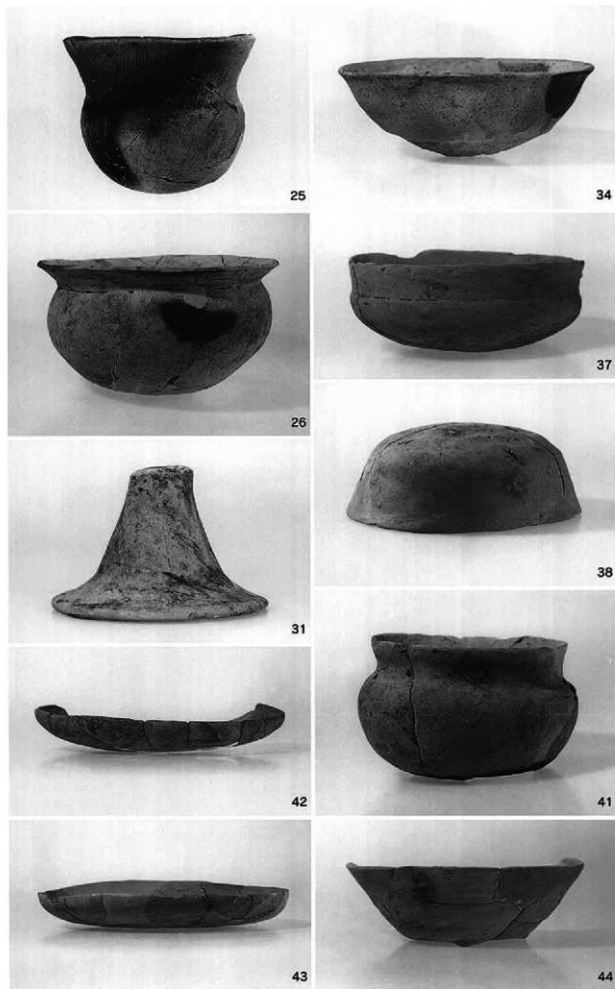
1 調査区北壁土層 中央付近



2 調査区北壁土層 中央付近から西を望む









54



63



55



65



58



59



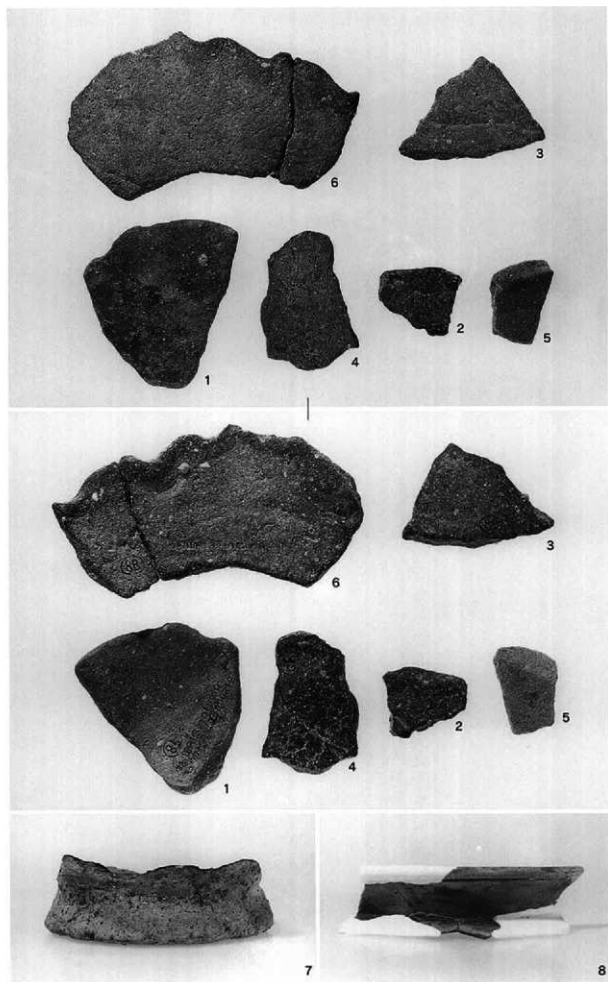
60



69



西隣接地





下層24



黑褐色土6



25



15



35



17



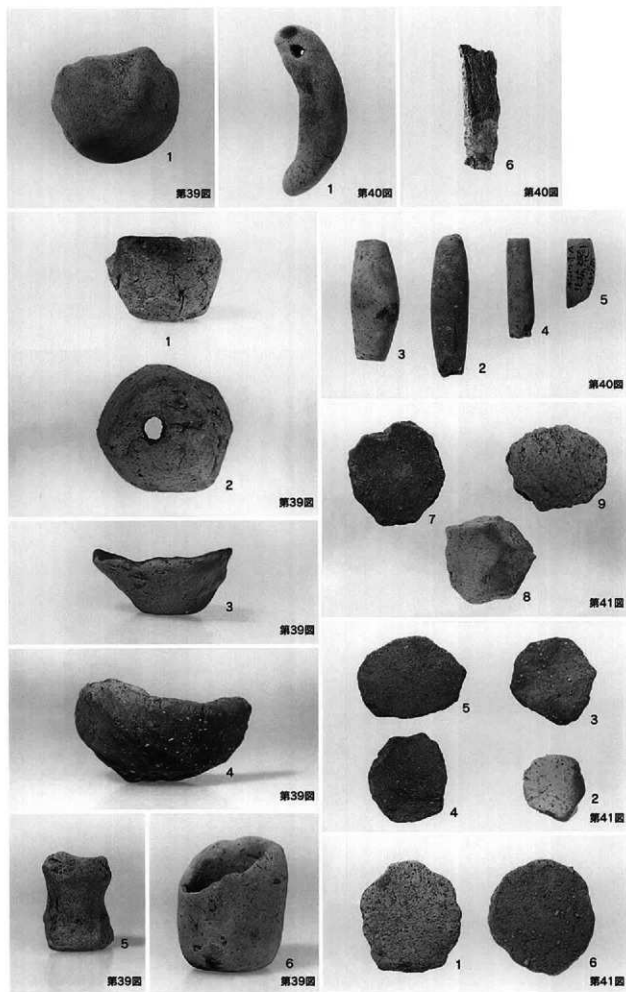
40

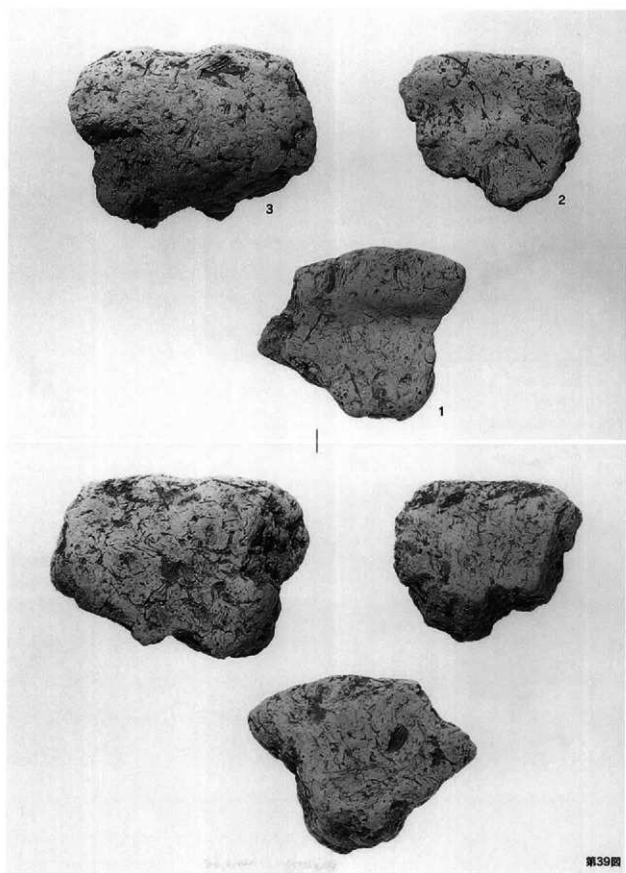


46

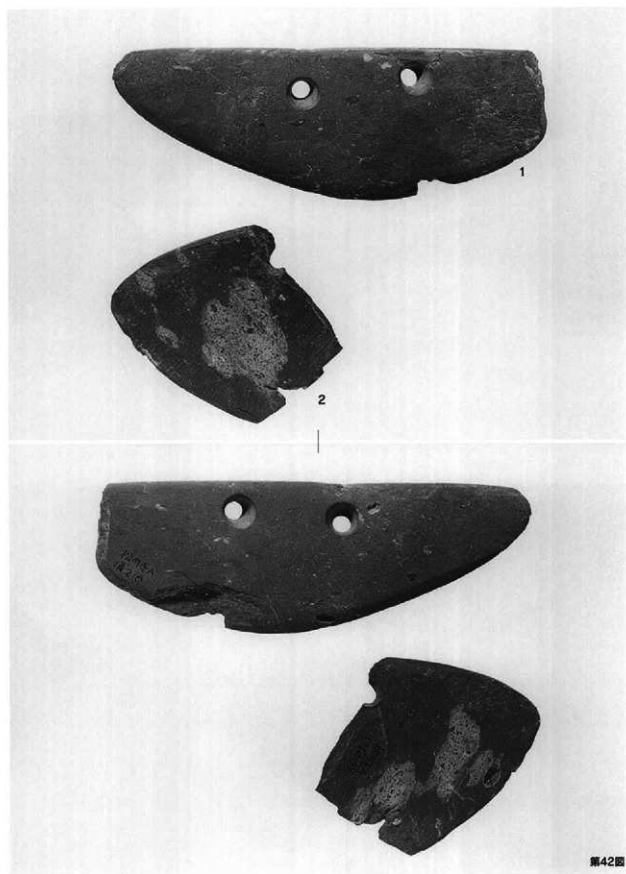


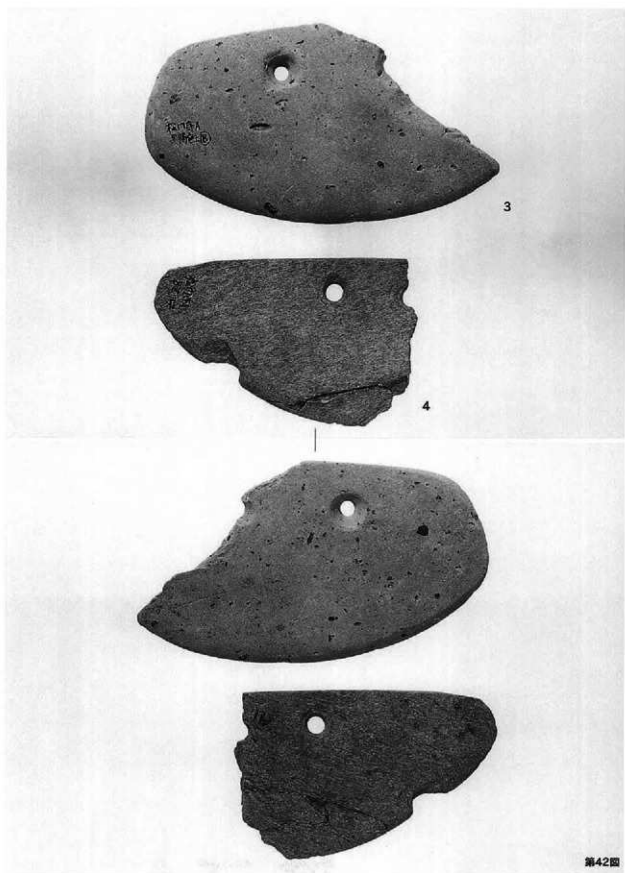
灰褐色土2



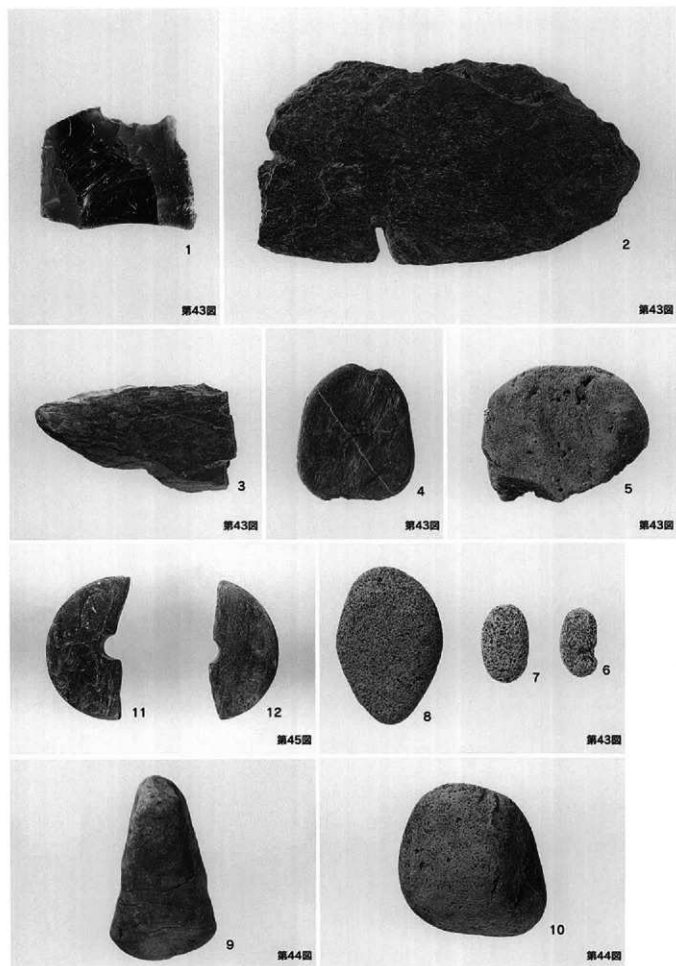


出土土製品





出土石包丁②





11

第44图



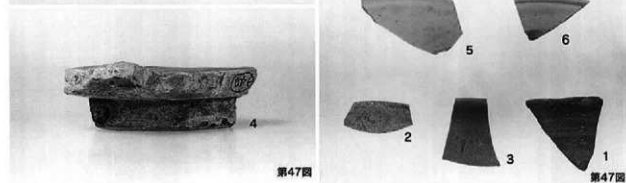
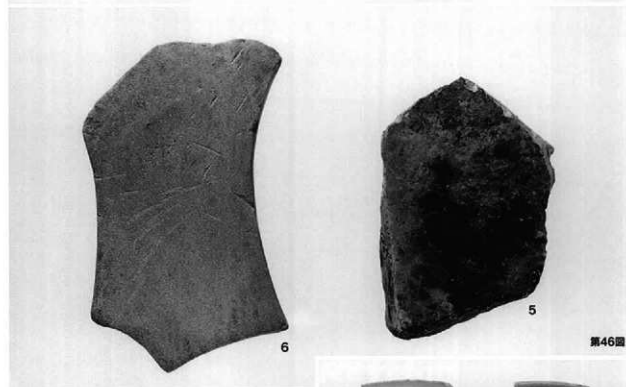
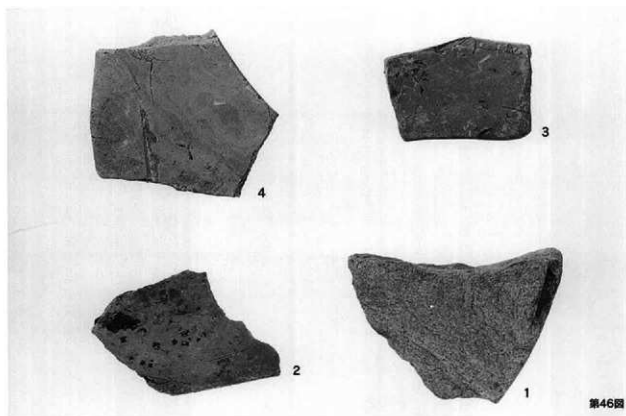
12

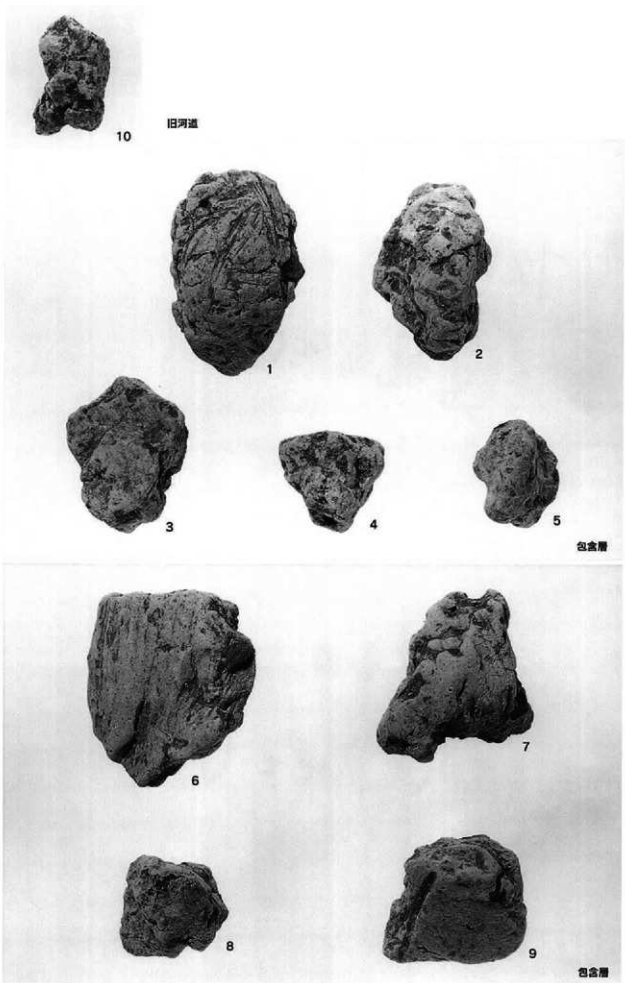
第45图



13

第45图





出土土製品

報告書抄録

ふりがな	しょうもんじえいせいせき							
書名	松門寺A遺跡							
別書名	福岡県浮羽郡田主丸町大字常盤所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	伊崎俊秋・今井涼子							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ・・・	東経 ・・・	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうもんじえいせいせき 松門寺A遺跡	福岡県浮羽郡 田主丸町大字常盤 字井尻	40829		33°20'45"	130°42'00"	1999.10.12 ～ 2000.3.14	2,200㎡	道路増設 (一般国道 210号浮羽 バイパス建 設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
しょうもんじえいせいせき 松門寺A遺跡		弥生時代～中世	土坑・溝 出河道	縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器 黒色土器 陶磁器 土製品・石製品				

福岡県行政資料

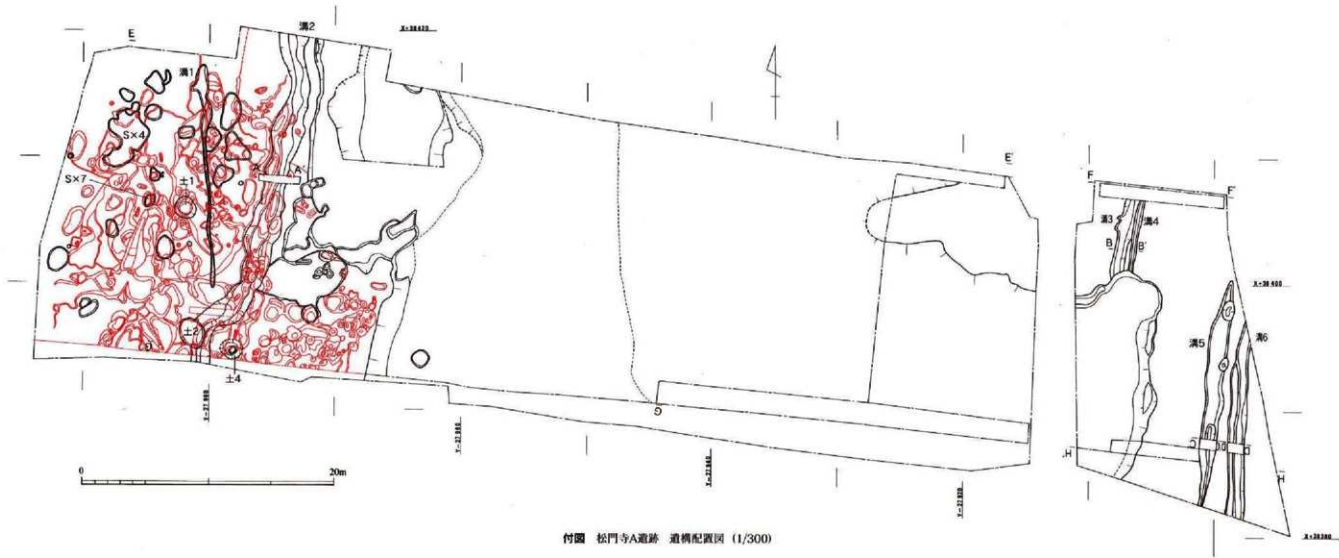
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 13	登録番号 2

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第18集

松門寺A遺跡

平成14年3月29日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号
印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4



付圖 松門寺A遺跡 遺構配置図 (1/300)